



ESD
Award
2020

第11回ESD大賞 受賞校実践集

主 催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

後 援：文部科学省 / 日本ユネスコ国内委員会 / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 / 株式会社教育新聞社

はじめに

Education for Sustainable Development (ESD) は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育といわれています。

地球上の様々な課題を自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、この ESD の理念に基づく取組を積極的に実践する学校を奨励する「ESD 大賞」を平成 22 年に創設いたしました。

本事業は、全国の ESD の優れた実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを目指しております。

11 回目となる今年は、コロナ禍にも関わらず全国の小・中・高等学校 33 校よりご応募をいただきました。

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではありましたが、第 11 回 ESD 大賞として、ここに受賞校を発表し、その実践をまとめました。

なお、第 11 回 ESD 大賞の副賞は、カシオ計算機株式会社様にご協力をいただきました。

本冊子が少しでも ESD 実践の参考・発展へとつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

目次

◆はじめに	1
◆審査にあたって	3
◆講評	4
◆文部科学大臣賞	
福島県只見町立只見中学校	5
◆ユネスコスクール最優秀賞	
東京都八王子市立浅川小学校	10
◆小学校賞	
埼玉県久喜市立栗橋西小学校	15
◆中学校賞	
宮城県気仙沼市立階上中学校	20
◆高等学校賞	
学校法人小松原学園 叡明高等学校	25
◆審査員特別賞	
成蹊小学校	29
成蹊中学校	34
◆ベスト・アクティビティ賞	
北海道羅臼町立羅臼小学校	39
◆スタートアップ賞	
千葉県八千代市立大和田南小学校	43

【審査にあたって】

第 11 回 ESD 大賞の審査にあたっては、ESD の目標である「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うこと」に基づき、審査を行いました。

加えて、

- ① ESD の目標を実現するための教育活動を組織的・計画的に実践し、その成果を読み取ることができる。
- ② ESD についての指導内容・方法等に工夫改善され、新しい提言が行われている。などの観点も重視されています。

なお、「ベスト・アクティビティ賞」とは、学校や地域の特性を生かしたオリジナリティのある活動、他校にも生かせるアイデアに富んだ取組を行う学校を表彰しています。

「スタートアップ賞」はユネスコスクールに加盟して 3 年未満（加盟していない学校含む）の学校を対象とし、優れた実践を行っている学校を表彰しています。

今回惜しくも受賞を逃した学校においても、優れた取組が多くありました。各学校におきましては今後一層精進され、ESD の発展・充実にに向けた取組となることを期待しています。

【講評】

細谷 美明

NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム理事、ESD 大賞査委員長

1 文部科学大臣賞（福島県只見町立只見中学校）

学校がある山間部から海の環境を考えるという「出口の実態から入口の課題を探る」といったダイナミックな発想と、ブナの木という地域素材からカラーホイールづくり、海岸地域である和歌山県への修学旅行、新聞紙でのレジ袋づくり、大学との連携によるウニの飼育などの多彩な体験活動、そしてそれらを体系化したカリキュラムが素晴らしい。

2 ユネスコスクール最優秀賞（東京都八王子市立浅川小学校）

1～5年生が地域のよさや課題を見つける活動を行い、6年生がそれを集大成した地元高尾山のガイドという系統的なカリキュラムであり、体験と学習が一体化した土台のある取り組みである。

3 小学校賞（埼玉県久喜市立栗橋西小学校）

学校の教育課程にSDGsを位置づけ、学校全体がESDに取り組んでいることが一目でわかるインパクトのある発表である。各取り組みをもっとよく知りたいといった衝動に駆られる。

4 中学校賞（宮城県気仙沼市立階上中学校）

被災した学校ならではの現実味のある活動であり、中学生が地元住民の一員として防災訓練に参加しその運営にも携わっている姿は、まさに震災の風化を防ぎ防災意識を持続しようとするESDの精神の象徴である。

5 高等学校賞（学校法人小松原学園 叡明高等学校）

生徒全員が課題を設定し探究活動を行っており、地域の課題をフィールドワーク等により発見し、その解決のために調査・研究したのち解決のための提案までしている。高校生ならではの実効性のある提案は地域貢献につながる。

6 審査員特別賞（成蹊小学校・成蹊中学校）

小学校ではフィールドワーク後に環境に関する地図を作成し、中学校ではジェスチャーゲームを通しESDの各課題に関わっていく。双方とも体験やワークショップといった主体的・対話的な活動を取り入れ課題意識が小・中学校で継続されるユニークな取り組みである。内容的にも小・中の系統性が出るとさらに質が高いものとなる。

7 ベスト・アクティビティ賞（北海道羅臼町立羅臼小学校）

地域の素材や人材を遺憾なく活用し、様々な体験活動を通し海や山等の環境保全の意識を着実に子供たちに定着させた。さらに、地域の伝統芸能にも触れ、東京大学など外部との交流や発表活動を通し、自分の地域のよさを多角的に発見する視点がよかった。

8 スタートアップ賞（千葉県八千代市立大和田南小学校）

英語学習は単なるツールであって、「米」をテーマにした文化交流と服の寄付を通しベトナムとの国際交流を果たした点が高く評価できる。内容も体系的・系統的であり、ユネスコスクール登録3年未満の学校だが、将来性が期待できる。

只見中学校コンソーシアムの形成と海洋教育の視点を入れたESD

1 はじめに

本校を含め只見町内の小中4校では、海洋教育の視点を付加しESDを行っている。小学校3校は早い段階から教育課程に位置づけて、ESDに取り組んでいた。中学校も2017年にユネスコスクールに認定していただいたが、実質的な活動は行われていなかった。令和元年度になり、校長始め担当教師が町内外の実践例を学び、他校の子どもたちが意欲的に学ぶ姿を目の当たりにした。これがきっかけでESDを本格的に取り入れた活動に着手した。結果から言えば、海洋教育の視点を入れて学ぶことにより、俯瞰的に物事を見たり、身近なことに目を向け行動できたりする生徒が増えてきた。また、この活動は地域住民の応援をもらうだけでなく、生徒の学力向上にも繋がった。そして、只見町で生活するには欠かせない洪水や大雪に対する自分たちの役割について考えられる子どもたちが、着実に増えたことが非常に喜ばしい。

2 実践内容

(1) 只見町概要

只見町は福島県の西側に位置し、日本有数の豪雪地帯である。年間積算積雪量が13mを超える年もあり、非常に厳しい自然環境にある。河川距離で新潟までは約160kmあり、日常から海を意識するには難しい環境にある。また、海から直線距離で約70kmであるが、冬期期間は積雪のため、最も近い新潟の海に通じる道は例年12月から5月の連休まで閉鎖される。しかし、この雪は町に豊かな水をもたらし、米とトマトを中心とした農業に大きな影響を与えている。また、この水を利用し、水力発電所がいくつも並んでいる。これらは地域経済に大きく影響を与えている。



只見町はユネスコエコパークに認定され、豊かな自然と人間の共存できる地域として、国内10カ所ある

エコパークの1つとなっている。近隣市町村と共有するブナ林の面積は、白神山地より多く世界中から評価されている。

(2) 海洋の視点を付加したESDの活動

①海浜のクリーンナップ作戦

海洋教育への取組のきっかけ作りとして、海辺のゴミ拾い活動と、海での魚釣り体験を行った。会場は上越市海洋フィッシングセンター内の埠頭で、ここでは全員がフグなどを釣ることができ、海の生物について興味を持つことができた。海浜のゴミクリーンナップ作戦では、釣り場近くで約一時間に渡り海浜のゴミ拾いを行った。生徒が予想していたようにペットボトルなどのプラスチックゴミが多く、ゴミ袋13袋分のゴミを拾うことができた。その多くは日本のゴミだったが、中には中国語や韓国語が書かれているものがあり、遠くから流れ着いたことを知ることができた。また、海外に日本のゴミが流れ着いていることを心配する生徒もあらわれた。海辺の人たちが捨てたゴミだけでなく、上流の河川から運ばれるゴミについても多いのではと考える生徒もあらわれた。河川の上流に生活する我々が注意することで、海外の環境を良くすることに繋がるということも考えられるようになった。この体験が地球環境を考えるきっかけになり、もっと学び、強く関わりたいという探究心に火がついた。



海外からと思われるペットボトル

②英語弁論大会・青少年主張発表等での発信

生徒たちに衝撃を与えた海浜のゴミ拾い活動は、思わぬ方向に発展した。活動のまとめからその感想を発信する実践へと繋がった。ある生徒が自分の気持ちを英語弁論大会で発表し、より多くの人に海ゴミのひどさと、将来あるべき姿の海について堂々と述べた。また、もう一人は町の青少年主張発表の場をもらい、海

で体験してきたこと膨大なプラスチックゴミの問題から、地球温暖化防止に

ついて考え実践していること、身近なところからの取組が重要であることを発表した。その後も論文や作文で各種コンクールに応募する子どもたちが多く現れた。



私たちの海を守れ！を題材に英語弁論

英語弁論 Save Our Seas (一部抜粋)

私たちがすぐできることはたくさんあります。私たちは自分たちの故郷、地球を破壊しようとしていることに気付くべきです。私たちは、自分たちの行動によって、たくさんの動物が危機に直面していることに気付くべきです。私たち、学生が日常生活でできることはたくさんあります。小さな一歩は小さな違いを生みますが、ここにいる全ての方々が小さな一歩を踏み出したら、大きな進展になります。

S.O.S 私たちの海を守りましょう。

③プラゴミ削減宣言の実施

海洋プラゴミ、地球温暖化の問題を自分事として捉えるために自分なりにできることを学級に掲示した。また、何度か見直し・反省して次の行動に移せるようにした。しかし、海を見なくなって二ヶ月が経過し、子どもたちの意識の中で海は過去のものとなってきている。インターネットで映像や写真を目に触れさせることで、海を身近に感じさせるようにした。

④海を感じる修学旅行の計画

海を知り・学び・体験する修学旅行を計画した。計画を立て、訪問先とのやりとりをする中で必ず海を学ぶことができるからだ。また、訪問先で只見町の物産販売をすることも計画に入れた。町のことをよく学び、地域の人と多く関わることで地域で生徒を育てるという観点からも重要だと思ったからだ。例年京都・大阪と関西方面の旅程を組んでいたが、今年に関しては、本州最南端の和歌山を目指すことにした。

- ・串本古座高校、潮岬中学校との交流
- ・両校と共に海浜の海ゴミ拾い
- ・道の駅での物産販売
- ・近大マグロの養殖体験
- ・シーカヤック&SUP体験

しかし、新型コロナウイルスの影響で、行き先を変更しなければならなくなりました。できるだけ

内容は変更せずに、行き先だけを変えるようにした。詳しくは後述する。

⑤ケンタロ・オノ氏による講演

キリバス代表理事ケンタロ・オノ氏にキリバスの現状と地球環境改善の必然性についてご講演頂いた。キリバスの場所も分からない生徒が大半だったが、海面上昇により今後難民になるかもしれないキリバスの画像を見せられ、子どもたちの中には「自分たちでできることは何だろう？」と考え行動できる生徒が増えてきた。講演後クラスで座談会をし、生徒たちが現在海ゴミ



地球温暖化の危機、海ゴミの多さを伝えるオノ氏

を減らすために活動していることなどを一人一人と話した。

⑥バフンウニの飼育

海洋から地理的に離れている只見町で、いつも海洋を意識して生活することは非常に困難である。特に冬期間の生活は雪に閉ざされ、町から出ないで生活をしている生徒も多い。インターネット環境があるため興味関心が高い生徒は検索もできるが、やはり本物にはほど遠い。そこで、海洋生物を実際に飼育することで、その課題を解決しようと考えた。飼育のしやすさの点から、ウニ(英: Sea urchin)を選択した。総合学習だけでなく、理科での生物分野で取り上げてもらい、教科横断的に学習を進めることができた。お茶の水女子大学の協力の下、未受精卵と精子を提供して頂き、プレパラートの上で受精に成功した。冬休みの宿題は、このバフンウニを観察しながら飼育することが課せられた。生徒だけでなく、保護者も一緒になって海を感じ続けることができた。ウニを飼育するための水は、学校の近くでわき出る清水に海塩を入れて作っている。飼育水から海までのつながりや命の尊さも学ぶことができ、非常に良い教材となった。

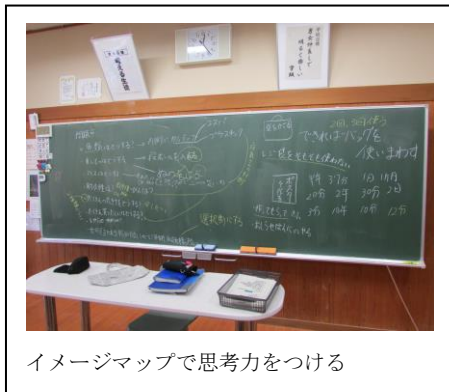


雪の中、飼育水を汲む生徒たち

で、その課題を解決しようと考えた。飼育のしやすさの点から、ウニ(英: Sea urchin)を選択した。総合学習だけでなく、理科での生物分野で取り上げてもらい、教科横断的に学習を進めることができた。お茶の水女子大学の協力の下、未受精卵と精子を提供して頂き、プレパラートの上で受精に成功した。冬休みの宿題は、このバフンウニを観察しながら飼育することが課せられた。生徒だけでなく、保護者も一緒になって海を感じ続けることができた。ウニを飼育するための水は、学校の近くでわき出る清水に海塩を入れて作っている。飼育水から海までのつながりや命の尊さも学ぶことができ、非常に良い教材となった。

⑦イメージマップを使用して意見交換

課題解決の手立てを考える段階では様々な意見が出されて、まとまらないことが多かった。教科指導や総合学習でイメージマップを使って情報の共有をすることを学んでから、自分たちで積極的に黒板を利用するようになった。少数意見を大切にしながら、よりよい方法を見つけられるようになった。プラゴミ削減のために『紙製レジ袋』を使うことや、袋の問題点について話し合いをするために有効なツールとなった。



イメージマップで思考力をつける

⑧新聞紙でレジ袋作り

①の海浜のクリーンナップ作戦を経験し、考え、行動に移したのが新聞紙を利用したレジ袋作りである。海洋プラゴミや地球温暖化防止のことをもっと多くの人に知ってもらいたいと願う気持ちがその原動力になった。何度も熟議を重ねレジ袋を作り地域のコンビニに使ってもらうことになった。生徒の制作意欲が高まっただけでなく、製品に対する責任を負うことも学ぶことができた。また店に自分たちの取組をポスターにして掲示してもらっているため、生徒が地域の方から声をかけてもらえるための励みになっている。地域の商店を利用して発信することで、学校の枠を超えてコンソーシアムが少し広がったことを実感できた。この後、7月のレジ袋有料化に伴って各種メディアの取材を多く受けることになるが、この時点では全国的な広がりになることは予想



新聞レジ袋のポスター

写真はキリバスの海

していなかった。

⑨第7回全国海洋教育サミット 優秀賞受賞

令和2年2月に東京大学で開催された第7回全国教育海洋サミットへ参加し、①～⑧の取組について発表してきた。



ポスターセッション

山あいの只見で海洋教育を行っている理由を述べ、山と海、海と世界は繋がっていることを主張した。小さな気づきが、校内だけでなく町をも巻き込む活動に展開した点が評価された。学校としてはホームページや新聞等のマスコミを活用し、取組を広く発信することを心がけてきた。子どもたちがHPを更新することも行ってきた。この受賞は子どもたちが取組への自信を持っただけでなく、将来の地球を守る行動を広めていかなければという意識向上に繋がった。

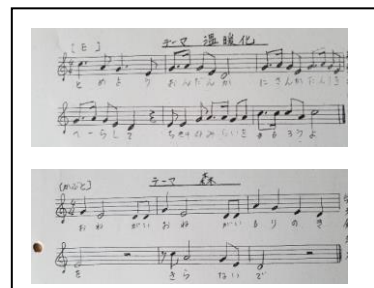
⑩SDGs カラーホイール作成

総合学習で学習したSDGsについて学年を超えて学んできた。学んでいく中で子どもたちがカラーホイールの存在に気づき、校長が試作した。地域の素材を利用してできないかという考えが出てきた。令和2年11月からは地域のブナ林を利用して作成し、これを只見中の活動に賛同して下さる方に配付しており、現在300個以上作っている。本校の新聞紙レジ袋を紹介していただいた小泉環境大臣も身につけていただいている。



⑪教科横断的な取組

各教科で環境に関わる活動を取り入れて授業を展開する試みがなされてきた。教科横断的な活動が発達となってきた。



- ・理科「海洋生物の飼育」
- ・音楽「環境ソングの作曲」
- ・国語「主張発表の論文指導」「県主催 国際論文」
- ・美術「環境ポスター」
- ・英語「英語弁論」
- ・技術「SDG s カラーホイール作成」
「コキアを利用した清掃活動」

・社会「持続可能な社会を目指すための意見交換」
子どもたちは発想が良くなっており、どの場面でも環境を意識するようになってきた。

⑫新聞紙レジ袋の広がり

⑧の新聞紙レジ袋が爆発的に広がったのは、今年7月から始まったレジ袋有料化からである。福島県内の新聞社2社に取り上げていただいてから5つのTV局、ラジオにも取材を受けた。これらを通じて本校の取組を知った方から



直接手紙を頂いた。また、町の方にたくさん励ましていただく声もかけていただけるようになった。コロナ禍で活動が制限されていた子どもたちは、新たな活動場所を得ることになった。また、町内の商店などから新聞紙レジ袋を利用したいという申し出が増え、現在9店舗で扱ってもらっている。月間の生産量も400枚ほどになり、休み時間やスクールバスを待つ時間を使っている。それでも足りない状態になっている。

⑬新聞紙レジ袋作成教室の開催

子どもたちの活動に手を差し伸べてくれたのが、町の教育委員会だった。子どもたちの夏休みに合わせて【新聞紙レジ袋作成教室】を町民向けに開催していただいた。講師は中学生であり、4会場で7回の開催が実現された。講習会の終わりに新聞紙レジ袋生産が間に合わないことを受講者に伝えると、その後月に100枚程度の寄付が集まるようになった。



⑭米袋を利用して発信

新聞紙レジ袋を納入していた業者から、もう少し丈夫な袋が欲しいという要望が出されるようになった。これをヒントに地元の小さな米焼酎蒸留所に贈答用の袋を提案した。奥会津蒸留所で作っている「ねっか」は国内外で沢山の賞を受けている。この発信力に便乗することを考えた。作り方は家庭科教員の指導を受けたが、「ねっか」のロゴも丁寧に手書きし、納品している。レジ袋も「ねっか」の袋も子どもたちが週一回各店舗に在庫を確認し注文を受けている。この製品は納品係の生徒が統括し、納入状況を記録している。



⑮修学旅行の実際

様々な学校活動が中止、規模縮小されていく中で、修学旅行も例外ではなかった。和歌山で海の活動を心待ちにしていた子どもたちに行き先変更を伝えるのは心苦しく、落胆する姿が目に見えた。実際に行き先変更を伝えると、予想通りの反応だったが、宮城県であれば実施できそうだとことを伝えた。宮城の東松島市に変わったとしても海の活動がしたいという子どもたちの考えはブレることはなかった。子どもたちが今まで学習したことを修めたいと感じたからであり、安易に自分たちの方針を変えようとはしなかった。行き先の変更は令和2年8月であり、この時にはESDの効果を肌で感じられるようになってきた。変更先の学習は、以下の通りである。

- ・漁業体験(釣り、刺し網漁、かご網漁)
- ・シーカヤック体験&SUP
- ・大浜海岸の海ゴミ拾い活動
- ・海ゴミ&地球温暖化問題ディスカッション



この活動でも協力者を増やすことができた。大浜海岸の海ゴミ拾い活動では東松山市商工観光課の小山氏をはじめとする6名の方が手伝いに来ていただいた。また、昨年11月に来校したキリバス代表理事のケンタロ・オノ氏も駆けつけてくれた。オノ氏によるマ

イクロプラスチックの説明を受けてから活動を開始した。また、この日の夜には海ゴミ&地球温暖化問題のディスカッションに参加いただいた。事前にオノ氏から子どもたちには宿題を頂いており、「私たちが望む未来」について一人一人が発表をした。



⑩地域防災訓練

只見町は2011年の豪雨災害を経験し、只見中学校を会場にして小学校と地区振興センターと連携、協働し地域合同防災訓練を行っている。この訓練により、地域コミュニティの強化だけでなく、児童生徒の健全育成にも寄与していることを報告できる。小学生の登校時間に合わせて地域の防災放送で呼びかけ、中学校に避難する。中学生が避難経路に立ち、誘導を行い地域の方も20名程度参加している。

この行事の主なる目的は人命救助と「自助・共助・公助」を学ぶことであるが、様々な活動を通して、世代を超えた協力が見られた。避難に参加する一般



中学生が誘導

の方は、定年を迎え自宅で過ごしている方が多いが、孫が学校で活動する様子を見ることができ、非常に満足だという。また、生徒自身も地域の方々とふれあい、地域への所属感も育ってきている。核家族化が進み、縦の関わりが少なくなってきた現在、この地域合同防災訓練は住民の絆を確かめるだけでなく、児童生徒の健全育成に大いに役立っている。この活動を通して地域で子どもたちを育てようという考えが、強まっているのも確かである。そして、地球温暖化を少しでも遅らせ、この地域を守っていくという気持ちがより強固なものとなった。

3 成果と課題

子どもたちの小さな気づきだった海浜ゴミが、地域を巻き込み、全国に広がりを見せた。知ること、動くこと、協力することが大切であることを学ぶことができた。海洋ゴミと豪雨水害といった一見関係なさそうな事柄も繋がっており、持続可能な社会の一員として、中学生が多なる力になることを実感することができた。遠く（海）と足下（地元）が近いこと、只見

中コンソーシアムを基盤とし、さらなる発展に努めていきたい。

現3年生を中心に行ってきた本活動だが、いかにスムーズに下学年に引き継いでいくかということ、そして彼らの多くが進学する只見高校で発展させていくかが課題である。他市町村の例を見ても高校生の発信力・行動力は桁違いである。町が展開する町内小中高のコンソーシアムをより強固に連携することで、彼らのためのバックボーンを作っていきたい。

ユネスコスクール最優秀賞

東京都八王子市立浅川小学校

校長 清水弘美

みんなで創る私たちの未来 ～Feel～Imagine～Do～Share～

1 はじめに

持続可能な社会の形成者とは、自分の「強み」を生かして「役割」を果たし、人と協働しながらよりよい社会を目指し続ける人のことだと考えている。

そのために、本校では学校教育目標を「役に立つ喜びを知る子」一本とし、子供たちが学校生活の中で自分にできることを見つけて、みんなのためにどのように活躍できるか、そして、どうしたらよりよい学校生活を作っていけるかということ、体験を通して学ばせている。

自分の生きている地域をしっかりと見て、聞いて、自分事として感じることから学びは始まる。ぼんやりと受け身で生活していた時には見えなかったことが、意識することで見えるようになる。見えてくれば、何かを感じその先へ進めるのである。

本校のESDは、子供たち自身が感じること(FEEL)を大切に組みこんできた。SDGsのゴールにそって自然環境問題だけではなく、人とのつながりや社会経済までもも考える教育活動をめざしてきた。

ただの一人も取り残さないで、みんなの願いを叶えるために、役に立つことを喜べる、そんな社会の形成者を育てていきたい。

2 実践内容

(1) カリキュラム・マネジメント

子供たちがつかんだ課題を解決するためには、生活科や総合的な学習の時間を中心として、教科等の横断的な指導が必要となる。

例えば3年生の「織物」は、八王子の伝統的な産業であることから、社会科の「私たちの八王子」という単元を基本に、理科の「綿の栽培」や「蚕の飼育」、総合的な学習の時間の「織物文化」を地域の織物伝承会の方たちの力を借りながらつないでいった。仕上がった織物は学校行事の展覧会で地域の方たちに見てもらう事もできた。

また、4年生の環境学習では、社会科の「ごみの処

理と再利用」という学習に、図画工作で家庭では不要になったCDやカセットテープなどを再利用して「愉快的ミュージシャン」という作品づくりに活用した。特別活動の展覧会で多くの人に作品を見てもらうと同時に、ごみを減らそうというメッセージを伝えることができた。

さらに、学校の周りの自然環境を教材として、

1年生は、生活科で「くり山たんけん」

2年生は、生活科で「町探検」

3年生は、総合で「初沢山探検」

4年生は、総合で「川調べ」

5年生は、特別活動で、環境劇を制作・上演

6年生は、総合で「高尾山ガイド」

と、全学年を通して取り組み、自分たちの町の自然環境のすばらしさや、それを守っていく大切さなどを発信していった。

全校で教科等の枠を超えて取り組む学習は、学校生活全体に大きなうねりがおこり、児童会活動やクラブ活動など児童の自主的・主体的な活動にもつながった。その中で環境委員会の「ごみを無くす活動」や、「初沢山探検クラブ」などの活動が生まれてきた。

(2) FIDS (フィズ) メソッド

本校の教育活動の多くの場面でFIDSメソッドを活用し定着させた。そのことで、児童自身が先の見通しをもって取り組むことができるようにした。

FIDSメソッドとは、DFC (design for change) という、インド発祥の「世界中のすべての子供の心に『I CAN』を育てるグローバルな運動」の中で使われている、とてもシンプルな課題解決のプロセスである。その方法は次のとおりである。

FEE L

課題発見

「おもしろそう」「なんとかしないと」

「こうなるといいな」等



IMAGINE

意思決定・合意形成「みんなの願いを叶えるために話し合う」「みんなで乗り越えるために役割分担をする」

DO

みんなで決めたことを実践する。

SHARE

実践した中で自分が頑張ったことや、頑張っていた友達を認める。同時に、自分たちの活動から伝えたいことを形にして、発信して気持ちを同じにする仲間を増やす。

本校では特に FEEL に力を入れて、児童が意欲をもって活動に取り組める工夫を行った。また、自分たちで調べて、満足するのではなくそれを発信して、同じような気持ちを持ってくれる仲間を増やす活動まで広げていった。それこそが、持続可能社会を作る活動と言える。

(3) 各学年の活動の例

① 1年生「道路を安全に渡ろう」(特別活動)



<学習のねらい>

自分たちの道路の歩き方について振り返り、より安全に気を付けようとする態度を身に付ける。

FEEL

イラストや動画から身近にある危険な場所や危ない行動に気付く。

IMAGINE

安全な行動を皆で考える

DO

交通安全教室で、実際に安全な歩き方や横断歩道の渡り方を実践する。

SHARE

自分が実践したことを学級で発表して共有する。

② 2年生「きいろいベンチ」(道徳科)



<学習のねらい>

皆が使うものや場所を大切にし、約束や決まりを守ろうとする心情を育てる。

FEEL

事前にとったクラスのアンケート結果や写真から、みんなが使うものや場所について意識をもつ。



IMAGINE

教材を通して、約束やルールを守らない行動が相手に与える影響を考える。

DO

自分の体験を振り返る。

SHARE

自分はこれからどうしていきたいか発表する。

③ 3年生「風とゴムのはたらき」(理科)



<学習のねらい>

エネルギーの無駄を省くと同時に、エネルギーを効率よく使える仕組みを自ら考え、よりよい生活を作っていくようとする態度を育てる。

FEEL

ゴムの力を利用した車をつかって、ゲーム大会を行う。



IMAGINE

身近にある風やゴムの力を利用した物を考える。

DO

風やゴムの力を利用したものについて調べ学習を行い、身の回りのエネルギーについて知る。

SHARE

風やゴムの力を利用した未来の道具を考えて発表する。

④ 4年生「水はどこから」(社会科)



<学習のねらい>

安全で安定的に飲料水が供給できるような仕組みや資源の使い方を見直し、有効に使用することができるように考える。

FEEL

実際に水を汲みに行ったり、世界の水道状況の映像を見たりして、飲料水の供給の仕組みについて関心を持つ。

IMAGINE

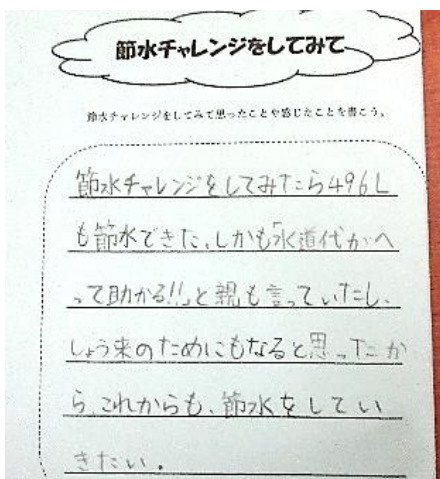
飲料水の仕組みについて知りたいことを決めてどのようになっているのか調べ学習をする。

DO

自分の生活を振り返り、節水計画を立てて、実践する。

SHARE

調べたことや、実践して分かったことをもとにレポートを作成する。



⑤ 5年生「イルカの海を守ろう」(道徳科)



<学習のねらい>

自然のすばらしさを知り、自然環境を大切にしようとする態度を育てる。

FEEL

映像資料から、オーストラリアにあるイルカと人間が交流できる希少な環境を守るための自然保護の取組を学ぶ。

IMAGINE

教材の事例を踏まえて、自分たちの身近な自然とは何かを想像する。

DO

学区域にある高尾山について、高尾山で起きている問題(観光客によるゴミ)をどうすれば改善できるかを具体的に考える。

SHARE

改善策をクラス全体で共有し、自分たちにできることを共有する。



⑥ 6年生「男女が助け合おう」(特別活動)

<学習のねらい>

男女の違いを尊重し、互いに分け隔てなく、よりよい人間関係を形成する力を育てる。





SHARE

学校行事が終わるごとに振り返りを行い、発表してクラスで共有する。結果的に男女仲の良い学級になっていく。

⑦学級会等の話し合い活動（特別活動）

＜学習のねらい＞

自分の意思をもって話し合いに参加し、人との違いを受け入れながら、合意形成をする技術を身に付けて、みんなで話し合っ課題をのり越えていこうという、主体的な意識を育てる。



FEEL

1学期の活動や、宿泊学習での生活を振り返り、アンケート調査を実施して、その結果をもとに課題をとらえる。

IMAGINE

異性の友達と協力するときに、なぜ問題が起こるのかを考え、その解決方法について話し合う。

DO

児童会の子供祭り、運動会などの学校行事において、男女関係なく協力したり、認め合ったりすることについての各自の目標を達成できるよう活動する。

(4)「浅川小 SDGs 曼荼羅」の作成

SDGs のゴールを「人とのかかわり」「自然環境」「社会経済」の3つの視点に分類して教育活動に当てはめ、それぞれのゴールにつながる教育活動の系統性を示したものである。この「浅川小 SDGs 曼荼羅」にそって各学年のつながりを意識した教育活動を行った。

特に、特別活動の視点を教育活動の中に織り込んである。掃除や児童会・委員会など学校生活を支える活動があってこそ、快適な学校生活が送れていることを教師も児童も改めて振り返る機会となる。持続可能な社会を作る基盤を特別活動によって作り上げているのである。



3 成果と課題

<成果>

○課題解決のプロセス「F I D S (フィッツ) メソッド」に取り組み、特にF E E Lに力を入れたことで、課題を自分事としてとらえることができ、児童の主体的な興味関心が最後まで継続していた。

○カリキュラム・マネジメントをしないと解決しない学習課題をたくさん作ったことから、各教科の学びに価値を感じる児童が増えた。

○SDGsを身近に感じて、自分でできることを考え実行する力が付いた。

○E S Dが、特別なものではなく、日常的な教育活動の中にあることを保護者・地域に発信することができた。

<課題>

●活動だけに満足せず、子供自身が学びの成果を実感できるような価値づけ方を工夫する。

●F I D Sの活動の中で、子供たちの願いを効果的にD Oしたり、S H A R Eしたりする場についてさらに広げていく。

小学校賞

埼玉県久喜市立栗橋西小学校
教務主任 田路政義

カリキュラム・マネジメントによる学校教育活動の改善に関する研究 ～SDGsの実現を目指すESDの取組を通して～

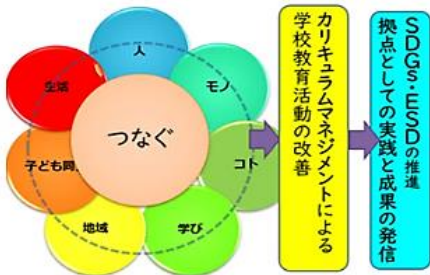
1 はじめに

本校は、平成30年度に、久喜市教育委員会の研究委嘱を受け、「カリキュラム・マネジメントによる学校教育活動の改善に関する研究」を学校研究課題とし、SDGsの実現を目指すESDの取組を始めた。今年度も引き続き子どもたちに「困難な課題に立ち向かい、様々な人々と力を合わせて解決し、よりよい未来を創ろうと考え行動する力を身に付けること」を目的とした研究に取り組んでいる。本校の目指す児童像は、文部科学省の「生きる力」、国立教育政策研究所の「ESDの7つの能力・態度」を踏まえ、学校教育目標、ESDの視点をリンクさせ掲げている。



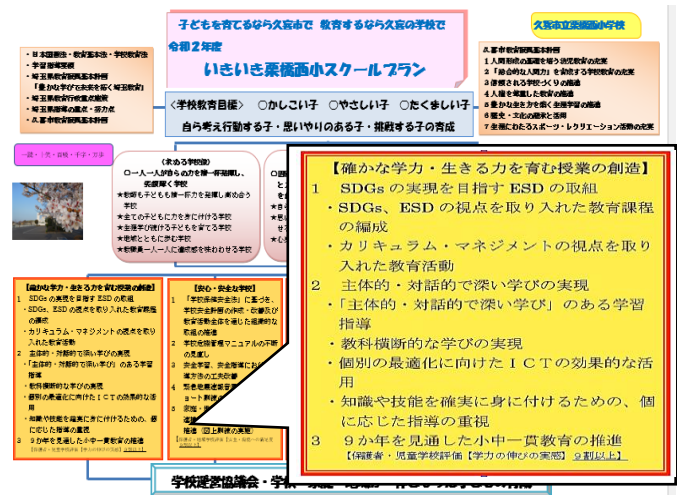
「目指す児童像の設定」

さらに、本校児童に育てたい資質・能力を身に付けるために、「人・モノ・コト・学び・地域・子ども同士・生活」をつなぎ、ESDを推進している。



「目指す児童像を実現するためのESDの取組」

また、組織として大きな力で研究を進めるにあたり、校長のスクールプランに、SDGs、ESDの取組を明記した。スクールプランと、教職員一人一人の自己評価シートをリンクさせることで、全教職員が同じベクトルで、SDGsの実現を目指すESDの取組に邁進している。



「校長のスクールプラン」

特に、カリキュラム・マネジメントの3つの側面である「教科横断的な視点、PDCAサイクルの確立、人的・物的資源の活用」を視点として、体系的・継続的な教育課程を編成した。さらに、SDGs、ESDの視点を取り入れた教科横断的な学習指導を計画・実践し、質の高い教育活動を展開することで、本校が目指す児童像の実現を目指している。



【テーマ及び実践の特徴】

「ESDの継続・発展可能な

カリキュラム・コーディネート」

- 教育課程全体をESDの視点で捉えなおし、再整理（教育課程のマップ化）
- 地域の課題発掘による地域密着型大単元の構成（世界につながる地域の活動）
- ESD自体の持続的発展を可能にする視覚化・デザイン化（学校内外への情報発信）

これらの取組を通して、SDGs、ESDの視点から子どもたちが自分事として学習課題を捉え、課題解決に取り組む児童の育成を目指した。また、教職員もSDGsやESDの取組に対する理解を深めることができ、本校独自のSDGsの実現を目指す教育活動を進めることができた。また、積極的な情報発信を行うことで、学校・家庭・地域で情報を共有し、深い学びを実現するESDの持続的発展を目指した。

2 実践内容

(1) 教育課程全体をESD視点で捉えなおし、再整理（教育課程のマップ化）

SDGsの実現を目指す取組として、ESDの4つの視点「環境・社会・経済・目標の土台」を柱にしたSDGs実践計画表を作成した。各一覧表には、1年生から6年生までの教育課程の中で、SDGs17の目標に関連のある教科、単元名等を明記した。学年間のつながりを意識し、全教育課程を通じてSDGsの実現を目指す教育活動を展開した。

また、ESDの4つの視点で系統的な学習指導ができるよう、各学年で指導する時期(月)、教科等、ねらい・学習内容等を明記したESDプログラムを作成した。これにより発達の段階を踏まえた学習指導を行うことができるようになった。

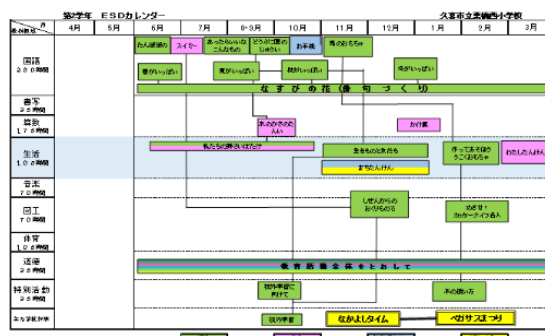
さらに、同様の4つの視点で各教科の指導内容を整理した年間の指導計画「ESDカレンダー」を作成した。生活科・総合的な学習の時間を中心に各教科・領域の単元等をESDの視点で結び、教科横断的な学習指導ができるようにした。子どもの学びを深めるESDカレンダー及びESDプログラムの活用を通して、ESDで身に付けたい児童の力を育んだ。

目標の土台 SDGsを目指すESDプログラム

久喜市立栗橋西小学校

学年	実施月	教科等	ねらい・学習内容等 ☆ESDで育む能力・態度
1	1月	生活科	ねらい:お年寄りから教えてもらうなどして、昔の遊びを調べ、昔遊びにはいろいろなものがあることに気づき、技や遊び方を工夫することの楽しさに気付いている。 単元名:「わんこのあそび」 ☆2 つなかりを尊重する態度
2	6月	道徳	ねらい:相手の気持ちや立場になって考える活動をおとて、困っている人思いやり、相手のことを考えて、進んで親切にしようとする心育を育てる。 教材名:「くみの木と小鳥」 ☆3 他者と協力する態度
3	通年	総合的な学習の時間	ねらい:実践の大豆の栽培活動の中で生じる困難や解決すべき問題と向き合い、課題の解決に向けてよりよい方法を考え、行動し、今後の生活に活かそうとする。 単元名:「食物観察・インレジャー！」(環境・伝統文化) ☆4 多面的、総合的に考える力

「ESDプログラム」



「ESDカレンダー」

「SDGs実践計画表」

学校教育目標
かっこいい子 やさしい子 たくましい子

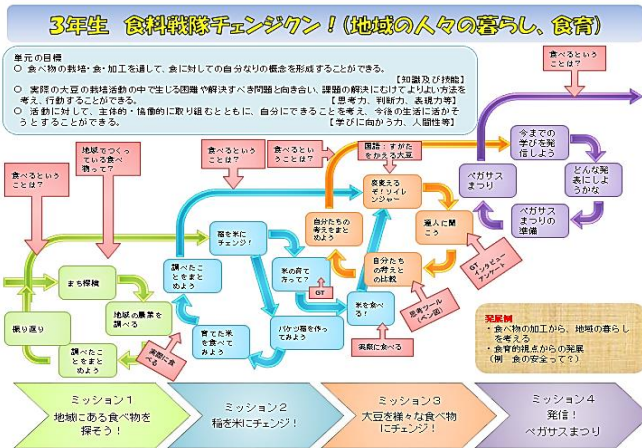
SDGs実践計画表
久喜市立栗橋西小学校

学校全体	学校全体	道徳	1年	2年	3年	4年	5年	6年	たんぽぽ	
学校全体	みんなが教育を受け、学習できるようにしよう。	道徳	よりよい学校生活、郷土生活の充実	教育活動全体をとおして						
学校全体	まじしい人をゼロにしよう。	道徳	食べられるくそをいれよう。	みんながけんこうで安心してくらせるようにしよう。	国に誇りを持って生きていく喜び	赤い羽根共同募金	エコキヤップ	選抜選りハガキ	外国語活動	
道徳	親切、思いやり、国際理解、国際理解、公正、公平、社会正義、相互理解、寛容、生命の尊厳	道徳	国際理解、国家理解、国家理解	個性の伸長、生命の尊厳、よりよく生きる喜び	自尊の育成、自律、自由と責任、希望と勇気、努力と強い意志、相互理解、寛容、公正、公平、社会正義	国際理解、国家理解、生命の尊厳	国: 水のかさのたんい	国: スイミー	国: みんな仲間だ	国: 水のかさのたんい
1年	脚: たしざん	脚: 楽しみ給食	脚: ソラノキ・トウモロコシ	脚: インフルエンザの予防	脚: 規則正しい生活	脚: がっこうだいずき	脚: トイレの使い方	脚: トイレの使い方	脚: トイレの使い方	
2年	脚: かけ算	脚: わたしたちの好きいだたけ	脚: グリーンピースさわやか	脚: わたしたちの生活	脚: 体の健康な生活	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	
3年	脚: わり算	脚: 好き嫌いしないで食べよう	脚: 食料観察！ チェンジクン！	脚: 体の健康な生活	脚: 体の健康な生活	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	
4年	脚: 文化や工場の外国との結びつき	脚: 食べて元気	脚: わたしたちの生活と食料生産	脚: 体の健康な生活	脚: 体の健康な生活	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	
5年	脚: わたしたちの国産	脚: 食べて元気	脚: わたしたちの生活と食料生産	脚: 体の健康な生活	脚: 体の健康な生活	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	
6年	脚: 日本とつながりの深い国々	脚: 食べて元気	脚: わたしたちの生活と食料生産	脚: 体の健康な生活	脚: 体の健康な生活	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	脚: 水のかさのたんい	
目標の土台	平和でみんなが安心してくらげることができるようにしよう。	道徳	親切、思いやり、国際理解、相互理解、寛容、生命の尊厳	個性の伸長、生命の尊厳、よりよく生きる喜び	自尊の育成、自律、自由と責任、希望と勇気、努力と強い意志、相互理解、寛容、公正、公平、社会正義	国際理解、国家理解、生命の尊厳	国: 水のかさのたんい	国: スイミー	国: みんな仲間だ	

(2) 地域の課題発掘による地域密着型大単元の構成 (世界につながる地域の活動)

地域を核とした学習を展開する生活科及び総合的な学習の時間の単元を、地域密着型大単元としてカリキュラムの中心に据え、教科等をつないだ。また、教育課程の実施状況を評価し、その改善を図っていく PDCA を活用し、子どもたちにとってより質の高い活動を展開した。年間を通じた教育活動を実施することで、生きるための力を身に付け、自ら考え行動する子どもの育成を目指した。

組を客観的に評価し、新たな創造へと意欲をつなげることができた。



「ペガサスマつりの様子」

(3) ESD 自体の持続的発展を可能にする視覚化・デザイン化 (学校内外への情報発信)

カリキュラムの視覚化・デザイン化に取り組み、組織的に実践することで、より質の高い教育活動の改善を図った。国立教育政策研究所「ESDの7つの能力・態度」を、本校の「ESDで育む3つの能力・態度」と関連させ、児童に身に付けたい力を整理し、「児童の反応例」として具体的に示した。それら児童の具体的な姿を達成目標として指導案に示し、授業の中で、目指す児童の反応を引き出した。また、児童に身に付けたいESDの視点を明記し、思考ツールやICTの活用、体験活動や振り返りの時間の充実などを具体的手立てとして、授業を展開した。



「活動内容や計画を振り返る掲示」

大単元の終末に、子どもと学校、地域の実態に合った体験活動を通して、学んだことを発信する生活科、総合的な学習の時間の発表会「ペガサスマつり」を実施した。「ペガサスマつり」に向けての取組では、チームで協働して課題解決に向けて取り組むプロジェクト型学習を実施した。自分の学びを他学年や保護者、地域の方へ発信する活動を実施したことで、多くの人と交流することができた。その中で、自分の学びの理解を深め、さらなる課題意識を育てるとともに、自分たちの取

「カリキュラム・マネジメントによる学校教育活動の改善に関する研究」
～SDGsの実現を目指すESDの取組をとおして～
【研究主題に迫るための手立て①】

SDGs、ESDの視点を明確にし、本校児童に付けたい資質・能力を育成する。
本単元では次の視点とする。

SDGsの視点: 1「住み続けられるまちづくりを」 12「つくる責任・つかう責任」 17「パートナーシップで目標を達成しよう」

ESDの視点: 3 他者と協力する態度
→他者の考えや行動に共感するとともに、協働してものごとを進めようとする態度。

【具体的な手立て①: 体験活動の充実】

自分たちで立てた課題である「家づくり」を協働して進める。

【具体的な手立て②: 学習形態の工夫】

個人の考えを構築する時間を十分に確保した上で、ペア・グループ・全体へつなぐ活動やジグソー法の活用など意図的な仕掛けを取り入れ、考えの共感・共有を図る。

ESDの視点: 5 多面的、総合的に考える力

→様々な考え方があることに気付き、人・もの・こと・社会・自然などのつながりや既習事項から自分の考えをよりよいものにする力。

【具体的な手立て①: 振り返り活動の充実】

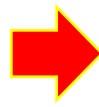
毎時間の個々の振り返りを一覧表にして他者と比較させることで、共通点や類似点、相違点など新たな気づきを促し、活動の見通しをもたせる。

【具体的な手立て②: 物的・人的資源の活用】

地域の廃材(材木、鉄、プラスチック)の様々な活用方法を調べるとともに、実際に地域のGT(保護者、小島工務店、酒井建設、鉄・プラスチックパイプ工場)の専門的な意見を聞くことで、新たな気付きやつながりを生んでいく。

「ESDの視点と手立てを明記した学習指導案」

「生きる力」	栗橋西小学校のESDで育む3つの能力・態度	「7つの能力・態度」との関連	目指す児童の姿 (C:児童の反応例)
知識・技能	O困難な課題に立ち向かう力	1 進んで参加する態度	C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
		7 批判的に考える力	C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
思考・判断・表現	O様々な人々と力を合わせて解決する力	3 他者と協力する態度	C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
		4 コミュニケーションを行う力	C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
学びに向かう力・人間性	Oよみよみ未来を創ろうと考える行動する力	2 つながりを感じる態度	C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
		5 多面的、総合的に考える力	C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
		6 未来像を予測して計画を立てる力	C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」



目指す児童の姿 (C:児童の反応例)
C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」
C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」 C:「やってみよう。」

「目指す児童の姿 (児童の反応例)」

情報発信として、全校縦割りグループ活動の「なかよしフェスタ」や生活科、総合的な学習の時間の発表会「ペガサスマつり」を実施し、多くの保護者・地域の方にも参観いただいた。また、本校HPにSDGs・ESDのページを開設し、本校の研究の取組を掲載したほか、コロナ禍における臨時休業中に、「SDGsを学ぼう」と題した動画を掲載した。また、スクールプランにSDGsの取組を位置付けたり、学校だより等文書で保護者・地域に周知したりするなど、情報発信に努めるとともに、家庭や地域の教育力を活用して、社会に開かれた教育課程を目指した。

SDGs11「住み続けられるまちづくりを」に位置づけ、久喜市役所と連携を図り、高学年を対象に実施した。子どもたちは、自分たちの住む地域にも危険があることや想定しない災害から身を守るための行動について学ぶことができた。

②SDGsを学ぼう教室



(4) SDGs・ESDを身近に感じ、関心を高める地域社会との交流・連携

①DIG (災害図上訓練)



芝浦工業大学と連携し、ボランティアの大学生が企画・運営した「SDGsを学ぼう教室」を開催した。昨年度は本校において、55名の親子が参加し、学生の考えたクイズを通して、楽しくSDGsを学ぶことができる取組となった。「SDGsのことがわかった」「環境について考え直すきっかけとなった」等の声が寄せられ、大好評のイベントとなった。今年度は、全校児童が端末を活用してオンラインで実施した。オンラインで学生にサポートをしてもらいながら異学年でSDGsに関するクイズを解いていくゲームに楽しく取り組んだ。

③久喜青年会議所との連携

久喜総合文化会館において、SDGs、E S Dを中心とした本校の研究の取組を発表した。児童がSDGsについて自分たちにできることを考え、発信することで、より身近なこととして捉える機会となった。

④岡山大学の開発教材の活用



SDGs 3「すべての人に健康と福祉を」に位置付け、岡山大学の開発教材「新型コロナウイルスについていっしょに考えよう」を活用し、各学級で指導の時間を設けた。また、医療従事者への応援メッセージの作成を行い、地域の病院へ届ける活動を行った。コロナ禍でも、SDGsに向けて自分たちができることや人のためにできることを考え、実行に移す経験となった。

3 成果と課題

<成果>

(1) 活動を通して育んだ資質や価値観

生活科及び総合的な学習の時間を核とした地域密着型大単元の学習で、「地域の方々や学級の友だちの力によって自分一人では解決できない課題に取り組むことができた」「SDGsを知り、自分たちで作上げたものの責任や活用方法を考えることができた」などの児童の学習の振り返りが見られたことから、「課題解決や他者との協働」「新たな価値を創造する力」を育成することができたと感じる。教科を横断しながら展開する地域密着型大単元構想を設定したことで、主体者としてE S Dに取り組む児童の姿が見られるようになってきた。

(2) 課題解決に向けた能力や態度の育成

「ペガサスマつり」や「なかよしフェスタ」など、他者と協働して課題解決に向けて取り組む活

動やそれぞれの役割を認識し互いに協力して目標達成を目指す活動を通して、「多面的、総合的に考える力」「他者と協力する態度」「コミュニケーションを行う力」等を育むことができた。SDGsに関する児童アンケートでは、特に「進んで参加する態度」「つながりを尊重する態度」「他者と協力する態度」において95%以上の児童が身に付いたという回答が得られた。また、アンケート結果を考察し、さらに身に付けたい能力・態度に対して「E S Dで育む能力・態度アッププラン」として取組の工夫を考え、実施することで、その後のアンケートでは「E S Dの7つの能力・態度」の全項目で85%の児童が身に付いたと実感していると答えた。

(3) 学校内外へのE S Dの発展

E S Dの視点で教育課程を捉えなおし、再整理する活動を行ったことで、全職員が各教科等での活動の価値や意味を俯瞰的に捉えたうえで、日々の教育活動にあたることができた。カリキュラムの視覚化・デザイン化に取り組むことで、本校のE S Dの持続的発展が可能になると同時に、本市内全小・中学校に取り組みが広がることも期待される。

<課題・今後の展望>

これまでの取組は、教師が主体となるものが多かった。教師たちが議論し、計画を立て、実践し、研究を深めてきた。今後は、ユネスコスクールの活動目的である「①ユネスコスクール・プロジェクト・ネットワークの活用による世界中の学校との交流を通じ、情報や体験を分かち合うこと②地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指すこと」を踏まえ、子どもたち自身が主体者となっていく教育活動へと変換していく。久喜市を越え広く世界の学校と交流し、多くの情報を分かち合い、地域規模の諸問題を解決しようとする活動を展開できるように、カリキュラムの開発及び指導方法の改善について追究していきたい。

中学校賞

宮城県気仙沼市立階上中学校

教頭 高須由美

持続可能な社会づくりを担う、東日本大震災の経験を活かした防災学習

1 はじめに

本校は人口約6万人の宮城県気仙沼市にある。気仙沼市は市内全校が、ESDの推進拠点となるユネスコスクールに登録し、「気仙沼ESD」を軸とした教育活動を展開している。中でも、「環境教育」「海洋教育」「防災教育」「地域文化教育」「国際理解教育」「産業・食教育」に重点を置き、各校の特色を前面に出した教育活動に取り組んでいる。本市は、今後、「気仙沼ESD」を教育現場だけではなく、広く市全体を巻き込み、SDGsを視野に市民と共に取り組んでいくこととしている。

本校は、東日本大震災発生前の平成17年度より、防災学習を通して、将来どこにいても地域の防災リーダーとして活躍する人材、災害に強い地域づくりに貢献する人材、これからの社会を「生き抜く力」を備える人材を育成したいと考え、総合的な学習の時間に力を入れて取り組んできた。当初から、「自助」「共助」「公助」を中学校3年間で学ぶカリキュラムとし、1つのサイクルとして、現在まで継続して行ってきた。「自助」は、自分の身を守ることで、災害発生時の被害を最小限にすることを目的として、主に「防災マップづくり」に取り組んだ。「公助」は公的機関の活動について知ることを目的として、消防署や市危機管理課の協力を得ながら、避難訓練等の体験活動を行った。「救出班」「救護班」「炊き出し班」「テントトイレ班」「避難所班」に分かれて実践してきた避難訓練は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災後、大いに生かされることとなった。24年度からは、本校生徒が近隣小学校を訪問し「防災カルタ」を活用した啓発活動も始まった。

平成29年度からは、体験活動の内容を精選し、「気仙沼ESD」の視点を重視した探究的な学習に力点を置くこととした。探究的な学習を進めていくうちに、地域全体における防災能力の向上に関する課題を見出した。そのひとつは、世代間で防災への意識差があるとことである。本地区の防災訓練等への参加者は

年々増加しているものの、決して多いとは言えず、参加者の年齢層は二極化しており、地域住民全体が命を守る行動がとれるかどうかが重要課題となる。防災に関する知識が備わっていたとしても、防災訓練などに繰り返し参加し、命を守る行動について常に考え続けていくことが大事であり、そのきっかけを中学生が与えていけると考える。もうひとつの課題は、「震災の風化」である。現中学3年生頃の年代が震災を体験した「最後の世代」と言われている。そのような中、中学生が地域の大人から聞き取った内容を教訓としてまとめ、語り継いでいくことに大きな意義があり、次の世代の命を守ることにつながると考える。

2 実践内容

(1) ESDを通じて育てたい資質・能力

○地域の現状や自分との関わりを理解し、地域の一員としての自己の役割や望ましい社会を実現するための行動の仕方を考えたり行動に移したりする力を育む。

○地域の人材や関係機関とのつながりを大切にす態度や他者と協力する力を高め、主体的に社会に参画しようとする態度を育てる。

○地域の人、もの、ことの中から問いを見出し、その解決に向けて仮説を立てたり、調査して得た情報を基に批判的・多面的・総合的に考えたりする力を身に付け、根拠を明らかにしてまとめ、自分の思いや考えを表現する力を身に付けさせ

(2) カリキュラム・マネジメント

本校ではESDの主な活動を防災学習（総合的な学習の時間）に据え、各教科・領域等との関連を重視した全体計画を基づき活動している。

「総合的な学習の時間」全体計画		
学校教育目標		
自ら学び、互いに協力して学び合う生徒の育成		
「総合的な学習の時間」の目標		
探究活動及び探究活動を通して、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的な学習態度
総合的な学習の時間を通して、知識・技能の獲得に努めるとともに、知識・技能の活用や問題解決の場面で、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	総合的な学習の時間を通して、思考・判断・表現の能力を高めるとともに、思考・判断・表現の場面で、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	総合的な学習の時間を通して、主体的な学習態度を育てるとともに、主体的な学習態度の場面で、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
【総合的な学習の時間の内容】Eのローテーション「持続可能な社会をつくる未来」東日本大震災の経験を活かした防災学習		
1年次 (5月1学期) 探究活動 (5月1学期)		
テーマ 「私たちは未来の防災活動家 ―「防災・防災」の学びと未来の社会への「提案」―		
探究課題	「防災」についての調査を実施し、地域防災の現状や防災の可能性や課題について考える。 「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
知識・技能	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
思考・判断・表現	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
主体的な学習態度	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
学習活動		
「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
評価方法		
「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
地域と外部人材(NPO等)との連携		
「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
各教科・領域等との連携(各教科等で育成する資力・能力)		
国際	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
社会	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
芸術	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
体育	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
外国語	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
音楽	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
情報	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
数学	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
理科	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
学年	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
学年	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。
学年	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。	「防災」の現状や課題について、自ら学びとく考え、問題解決(主体的)に取り組む態度を育てる。

・少年消防クラブへの加盟

毎年、防火・防災意識を高めることを目的とし、全校生徒で自主的な防災組織を立ち上げ活動している。年度当初に行う入会式では、気仙沼消防署長による講話並びに消防署員による規律訓練を全校生徒が受ける。規律訓練は生徒自ら、礼儀作法や集団行動の在り方を見直す機会となっており、その後の避難訓練をはじめとする防災学習のみならず、規律ある学校生活の向上にも一役を担っている。

秋には、毎年、2年生が消防署員、養護教諭の指導のもと救急救命講習を受け、心肺蘇生やAEDの使い方、けがの手当てなど、応急手当を習得する。



・気仙沼市総合防災訓練への参加

本市の総合防災訓練は毎年11月中の休日に開催されるため、学校は授業日に振り替えて、全校を挙げて参加している。午前中は家族と共に地区毎の一時避難場所へ避難し、避難所リストの作成や小学生のお世話など、中学生としての役割を果たしている。午後は本校体育館で中学生による避難所設営訓練を実施する。小学6年生と中学生は設営側に、それ以外の小学生は避難者として、防災教育推進委員にはその様子を見学していただき、助言をお願いしている。平成30年度には、生徒会で従来の避難所設営マニュアルの見直しを図り、誰もがマニュアルを見れば、避難所設営ができるようにイラストや分かりやすい解説を付けた改訂版を完成させた。本校では、全校生徒が生徒会専門委員会に所属しており、生徒会総務が本部を担当し、7つある委員会に地区割班、受付班、救護班、設営班、介助班、掲示班、伝達班に分かれ活動することとなっている。改訂版では、中学生としてできることや市役所職員、市議会議員、自治会長など、避難所を運営できる方が到着した時点で情報を引き継ぎ、指示に従うことも明記した。

今年度の12月には、市危機管理課職員の立会のもと、新型コロナウイルスへの対応を考慮した避難所初期設営訓練も試みた。これまで体験したことのないパ

(3) 地域と連携した防災学習

①防災教育推進委員会

平成24年に当時の校長と自治会長とで当地域における津波被害の犠牲者が気仙沼市で最も多かったという事実をうけ、地域防災の強化を目的として設立した。現在は、学区内にある保育所・小中学校・高校、警察、消防、市役所などの行政機関、JA、JFなどの民間組織、まちづくり振興協議会、自治会、消防団、婦人防火クラブなどの自治組織などの代表者(約40名)で構成されている。活動としては、年3回の会議と11月に実施する気仙沼市総合防災訓練における地区内の取組の確認となる。会議では、学校での防災教育の在り方や地域における防災の取組について協議している。後述の探究的な学習においても、地区住民に対する「東日本大震災時の行動に関するアンケート」や「聞き取り調査」等においても多大なる協力や助言を得ている。

②命を守る行動を身に付けるための体験的な活動

一ターションの設営などの実践を通して、地区割、受付、救護等において更なる改訂が必要であることが明らかになった。今後、防災教育推進委員会の助言をいただきながら、生徒会委員会毎に見直しを図り、令和2年度版を完成させたいと考えている。



・小学校での啓発活動

平成24年度から、本校の生徒が近隣小学校を訪問してカルタを活用した防災啓発活動を始めた。その後、防災紙芝居も加わり、平成30年度からは、塗り絵や防災クイズも取り入れ、小学1年～4年生との対話を大切にしながら「自分の命を守るために、津波が来たら、高いところへ逃げる」ことを繰り返し伝えている。



加えて、平成30年度からは、3.11を前にした3月上旬にも近隣小学校を訪問し、防災啓発活動を行っている。

(4) 東日本大震災についての探究的な学習

平成29年度は福島沖地震(平成28年)時の避難行動について、平成30年度は東日本大震災(平成23年)時の避難行動について、地区住民にアンケート調査を実施し、結果データをもとに、「予め家族で避難場所を決めていた人は、避難するまでの時間が短かった」などと考察・分析しまとめ、地域が抱える防災・減災の可能性や課題について中学生の視点で明らかにした。最大の課題として「震災の風化」、「震災がなかったことになってしまふという危機感」が挙げられ、その課題を解決すべく、令和元年度は、震災を知らない世代へ伝承するため、震災を体験した地域住民からの聞き取りをもとに教訓をまとめた。さらに、その教訓を伝える手段を、寸劇、朗読、紙芝居、クイズ、プレゼンテーション、シミュレーションなどの方法から選択し、伝承活動を試みた。

令和2年度は、再度、地域住民から東日本大震災についての聞き取りを行い、教訓や当時の課題、人との



つながりなどを視点に班ごとに探究課題を設定した。次に、聞き取り調査やアンケート集計、現地調査、文献研究等で情報を収集し、比較、分類、関連付けなど整理・分析した。そして、相手や目的、意図に応じて表現の工夫をし、自分たちの考えや提案などをまとめ、学習の成果を発信する場として防災学習発表会を実施した。

令和元年度は、聞き取った内容をまとめどのように表現するかという表現重視の活動を行ったが、令和2年度は、課題の設定や課題解決に向け計画を立てる力、批判的・多面的・総合的に考える力、自分の思いや考えを表現するコミュニケーションの向上を目指した活動に改善した。そのため、聞き取り調査から課題設定、計画立案、情報収集や再調査、発表の構想や資料作成など各段階を踏んで取り組ませた。また、調査活動や話し合いを円滑に進めるために意図的な縦割り班の班編制を行った。



なお、本校では、防災学習アドバイザーとして、平成29年度より東北大学国際科学災害研究所 准教授 佐藤翔輔氏による指導を年間3回(課題設定時、中間発表時、全校発表会時)受け、先進的な学習を行っている。

テーマ	総合的な学習の時間(防災学習) 年間指導計画(3学年 46/70時間)					
	8月	9月	10月	11月	12月	
ねらい	「防災機を自覚して」～東日本大震災の教訓から「防災・減災」を学ぶ、地域・社会とのつながりや役割について考えよう～ ・地域についての調査を通して、地域が抱える防災・減災の課題や課題について明らかにする。 ・被災地から、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、自分の生活や地域に役立てようとする態度を養う。 ・東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることで、防災意識を高める。					
計画	学習活動(1時間)	学習活動(1時間)	学習活動(1時間)	学習活動(1時間)	学習活動(1時間)	学習活動(1時間)
	課題の設定 ・防災機を自覚して、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、自分の生活や地域に役立てようとする態度を養う。 ・被災地から、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、防災意識を高める。	課題の設定 ・防災機を自覚して、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、自分の生活や地域に役立てようとする態度を養う。 ・被災地から、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、防災意識を高める。	課題の設定 ・防災機を自覚して、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、自分の生活や地域に役立てようとする態度を養う。 ・被災地から、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、防災意識を高める。	課題の設定 ・防災機を自覚して、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、自分の生活や地域に役立てようとする態度を養う。 ・被災地から、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、防災意識を高める。	課題の設定 ・防災機を自覚して、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、自分の生活や地域に役立てようとする態度を養う。 ・被災地から、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、防災意識を高める。	課題の設定 ・防災機を自覚して、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、自分の生活や地域に役立てようとする態度を養う。 ・被災地から、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、防災意識を高める。
評価	・防災機を自覚して、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、自分の生活や地域に役立てようとする態度を養う。 ・被災地から、東日本大震災の教訓や地域・社会とのつながりについて考えることを通じて、防災意識を高める。					

総合的な学習の時間(防災学習) 年間指導(3学年)

(5) 生徒が主体となった防災の取組

① 生徒会防災だよりの作成

平成 30 年度より、生徒会総務が中心となり、1 年間の防災学習を通じた学びをより広く地域に発信するため、広報誌「若潮～共に歩もう未来の防災～」を制作し、地区全戸へ配布している。

② 語り部活動

本地区にある平成 31 年 3 月にオープンした気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（旧気仙沼向洋高校）は、「将来に渡り震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける『目に見える証』として活用し、気仙沼市が目指す『津波死ゼロのまちづくり』に寄与することを目的とする」施設である。



（気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館HP）

当時の校長は伝承館長と話し合い、中学生による語り部活動を提案し、さっそく実現することとなった。校長の呼び掛けにより、全校生徒の中から十数名の生徒が手を挙げ、語り部としての活動が始まった。生徒たちは土・日曜日になると、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館に足を運び、「気仙沼東日本大震災伝承ネットワーク」の方々の指導を受けながら、語り部の練習を重ねた。様々な助言をいただきながら、与えられた原稿をそのまま読み上げるのではなく、「震災を知る最後の世代」として、微かでも自分の記憶や体験を交えて話すこと、身近な人から聞いた実体験やそこから得た自分の考えなどを加えて伝えることの尊さを実感するようになった。活動開始の年となった令和元年度は、一般来館者のみならず、JICA、ACCUを通して海外の方々へも震災の脅威や命の尊さを伝えた。また、安倍晋三内閣総理大臣にも語り部として館内ガイドを務めた。

活動 2 年目となる令和 2 年度は、全校生徒 109 名のうち 39 名の生徒が有志として活動している。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、3 月から 5 月いっぱい休止したが、学校再開後の 6 月より活動を再開させた。今年度初の館内ガイドは本校の新入生へ行った。2、3 年生の有志が放課後を活用して、1 年生全員を対象とした館内ガイドを行っ

た。この姿を見て、「自分もやってみたい」と新入生が 12 名加わった。また、2 年生の中からも新たに 6 名の有志が加わった。館内ガイドをする時期や対象については、校長と伝承館長との話し合いで決定し、保護者へ通知し、その都度、承諾を得ながら行っている。新入生や新しく加わったメンバーには、経験者が一緒に付き添いながら練習を重ねた。「気仙沼東日本大震災語り部ネットワーク」の方々からも毎回、助言をいただいている。



今年度は、コロナ禍のため、全国から多くの学生が修学旅行で遺構・伝承館を訪れたこともあり、同世代への語り部にも挑戦した。また、臨時休業中に、3 名の生徒が協力して、案内原稿の英訳をやり遂げてきた。海外の人たちにも「自分の言葉で伝えたい」という思いから、自主的に取り組んだことだった。7 月と 1 月には、実際に管内小中学校 ALT を相手に英語での館内ガイドに挑戦することができた。



1 1 月以降、毎月、月命日にあわせて一般来館者への語り部活動を継続している。



3 成果と課題

平成 29 年度の気仙沼市階上地区の総合防災訓練の参加者は 725 名、平成 30 年度は 851 名、令和元年度は 981 名と徐々に増えてきた。これは、生徒たちが地域の方々から得た避難行動に関するアンケートの結果・考察や聞き取り調査で得た教訓を積極的に発信したことが要因のひとつであると自負する。（令和 2 年

度は感染症対策の観点で最少人数での訓練であった)。中学生も地域住民の一員として、防災訓練の一部を担い、周囲の大人から褒められたり認められたりすることを通して、自己有用感を高め、主体的に取り組む態度が身に付いた。また、探究的学習を通して、地域の防災の重要性を自分事として捉え、「震災の風化」という課題に向け、仲間と協力し合って追究・解決しようとする意欲を高めた。さらには、地域全体の防災意識を向上させるために、地域住民のあるべき姿について自分なりの意見を持ち、自分の思いや考えを進んで表現し、行動する力も育成されつつある。その一つの例として、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の語り部にボランティアとして参加する生徒が出始め、活動を継続するとともに、挑戦しようとする生徒が増えるなど、生徒の行動に変容が見られるようになった。下記のデータは気仙沼市で実施した質問紙調査（3学年）結果の一部である。今年度6月と12月の結果を比較してみると、僅かではあるが、生活意識、地域参加、国際理解の項目で向上が見られた。

【階上中】		【3】年全体			
No.	質問	R2.6	R2.12	変容 (平均値比較)	
13	生活意識	自己有用感	2.03	2.25	0.22
14		挑戦意欲	1.89	2.00	0.11
15		社会貢献	2.42	2.83	0.42
16		夢や目標	2.00	2.28	0.28
17	地域参加	地域行事参加	1.86	2.00	0.14
18		ボランティア参加	1.42	1.67	0.25
19		国際理解	0.81	1.00	0.19

【上記の数値は肯定的な評価を3として、0～3の4段階で評価させ、平均をとったもの】

今後の課題は、ホールスクールアプローチやグローバルの視点で、ESDを軸としたカリキュラムを整理することである。また、生徒の変容を見るために、自己評価のみならず、ルーブリックの活用など教師側の評価の工夫が必要となる。

防災学習を軸としながらも、そこから環境教育や海洋教育、国際理解教育へと波及していかないか模索していきたいとも考えている。

「世界を変える」子供たちの可能性 ～SDGs を活用した当事者意識の醸成

1 はじめに

(1) 本校の教育活動について

本校は 2015 年 4 月、小松原高等学校が埼玉県東部の越谷市レイクタウンに移転し、叡明高等学校と名称を変え、生まれ変わった学校である。「叡智・高志・協調」を教育理念とした男女共学校であり、約 1700 人の生徒が在籍している。

本校では「EMS（「協働探究型」思考力育成教育）」と名付けた教育プログラムのもと、本校生徒たちに対して以下に示す力を育めるよう、日々の教育活動に励んでいる。

◎自分と、自分の属する社会の現在と未来を創り出す力。

- ・日々大きく変化しつづける社会のなかで、常に考えつづけ、いろいろな思想や文化をもつ他者と協力し、より充実した人生を送るための「答え」を見出していく力。
- ・確かな知識を身につけてそれを活用する力、また、あらゆる状況において論理的・多角的に物事を捉え、新しいものを生み出していく力。

上記のような目標を達成するため、各教科の授業において「双方向「対話」型授業」の実践を推進している。これは、教員からの一方的な教授だけではなく、生徒同士、あるいは教員と生徒との間で「双方向・対話」を重視した授業に価値を見出した結果である。また、「思考力・判断力・表現力」を身につけるうえで、生徒同士はもちろん、教員と生徒の間にも「双方向・対話」という要素は必要である。



さらに、目標を現実のものとするための手段として、ICT 教育の推進にも励んでいる。教員と生徒の授業をより充実したものとするために 2 年前、生徒 1 人につき 1 台のタブレットを導入した。現在では 1・2 学年の生徒全員が日々の教育活動にタブレットを用い、充実した学校生活を送っている。「総合的な探究の時間」においても、生徒たちはタブレットを用いてインターネットやアプリケーションを存分に活用しつつ思考を深めている。

(2) 「総合的な探究の時間」での取り組み

「総合的な探究の時間」（昨年度までは「総合的な学習の時間」）では 3 年前から探究学習を取り入れ、年度末には「プレゼンテーション大会」を開催している。

今年度も第 4 回目の「プレゼンテーション大会」に向け、1・2 学年の生徒全員が「総合的な探究の時間」に取り組んでいる。

「思考力・判断力・表現力」を身につけるうえで、「総合的な探究の時間」への取り組みは、非常に有効である。とりわけ、3 つの力のなかでも思考した内容を他者に示すための「表現力」は、育成することが難しいものだ。そのうえで「プレゼンテーション大会」という目標の存在は、生徒たちにとってモチベーションを高めるためのよい契機となっている。

それでは以下に、本校の「総合的な探究の時間」における具体的な実践内容を紹介する。

2 実践内容

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大が本校の探究活動に大きな影響を与えた。当初、例年どおりのグループワークによる授業展開を考えていたが、新型コロナウイルス対策として「密」の状況を作り出さず、飛沫感染を防ぐ授業展開へと舵を切らざるを得なかった。そこで、急遽シラバスを変更したうえで、専用のワークシートを作成し、社会的課題に対して生徒個々が取り組めるものへと変更した。

サステナブルな社会を築くためには、現代社会に

生きるわれわれが常に柔軟な思考と行動をしなければならぬのだということを思い知らされた瞬間であった。

(1) 「SDGs」をテーマに採用

[今年度のテーマ]

SDGsを通して自分と社会について考える
—「SDGs」17のゴールを達成しよう！

今年度の「総合的な探究の時間」においては、社会に存在する課題を見出し、その課題を解消することでSDGsのどのゴールを達成できるかという課題解決型の授業を計画した。

ただ、現在でこそテレビやインターネット等でSDGsのロゴやピクトグラムを目にすることはあるものの、今年度当初、その何たるかを知っている生徒はそれほど多くはなかった。

したがって最初の段階では、いくつかの手順を踏んで社会とSDGsとの関わりを理解させることに努めた。どのような経緯で、どのような目的のもとにSDGsが形成されたのか。SDGsが、なぜ必要なのか。そのようなことを理解する過程を経るだけでも、生徒たちは大きな気づきを得るはずである。

(2) ワークシートによる授業展開

先述したように、今年度は新型コロナウイルス対策ということで、教員のファシリテーションによって授業展開するのではなく（もちろん授業進行上、最低限のファシリテーションは行う）、ワークシートへの回答によって授業が進行するよう配慮した。

ただ、その方法では生徒間の対話が失われてしまう。それぞれが思考したことを共有しないのでは、その思考は生徒個々の思考の枠内にとどまり、思考力における大きな成長は得られない。したがって、コロナ禍においても何らかの形で互いの思考を共有し、その思考を深めあったり、広げあったりする環境を生徒たちに与えたいと考えた。

そこで、せめてもの対策として、「Google クラスルーム」を用いて以下の方法を実践してみた。

① 「Google ドキュメント」の1つのファイルを数名で共有し、設定された課題への回答を全員で共有・編集する。

① 「Google クラスルーム」で「質問」を配

信し、それに対する回答をクラス全員で共有する。

③ 授業中、生徒が回答しているワークシートを写真に撮って「Google クラスルーム」で配信し、クラス全員で情報を共有する。

実践してみた結果、①においては改善の余地があり、今後、このような方法をどのような場面でどのように使うか、という点について精査・検証していく必要があると感じた。しかし、②と③については、他の教科・科目の授業でも同様の使い方をしていることもあり、直接会話をすることなく生徒間での情報共有をすることができた。

[Google クラスルームの画像]



↑「Google クラスルーム」を用いて、生徒のワークシートを共有。授業担当からコメントを添えたり、生徒に意見を求めてみたりした。

(3) 目的

本授業においては、「SDGs に対する理解」に加え、以下に示す「目的」を設定した。

- ① SDGs について理解を深める。
- ② 自分の暮らす社会が、どのような社会なのかを知る。
- ③ SDGs を通じ、社会で起きていることに対する当事者意識を持つ。
- ④ 多くの種類の情報源（書籍・web 等）に触れる。
- ⑤ 課題「発見・解決」におけるアプローチ・プロセスを実践する。
- ⑥ 論理的思考力・批判的思考力を身につける。
- ⑦ 他者に対し、思考した内容を効果的に伝えられる表現力を身につける。
- ⑧ 授業内で得た知識や気づきが、将来どのように生かせるかを考える。

今回の「目的」のなかでも重要な位置を占めるのが、

③の「当事者意識を持つ」という点である。

世界中のさまざまな情報が即時的に得られる現代社会であるが、多くの生徒にとっては得られた情報について「当事者意識」をもつことなどほとんど無いに等しい。あまりにも簡単に情報を入手できるからか、あるいは、似たような情報を多く見聞きすることができるからか、その情報に対して希少性や臨場感を感じていないように思われる。世界で起きていることについて「対岸の火事」ではなく、自分に関係している事柄として捉え、対峙しようとする「意識・態度」の醸成が本授業の大きな「目的」の一つである。

まず、この点については、ワークシートで生徒たちに以下のような質問を投げかけた。

ワークシート

2030年あなたは何をしていますか？
社会はどのようになっていますか？
想像してみてください。2030年のあなたと社会について、できる限り具体的に説明してください。

これが、本授業のスタートである。この質問が、授業の「目的」を達成するという点において奏功したか否かは今後検証が必要であるが、少なくとも10年後の自分と社会について思いを巡らせ、そこから逆算して現在を考えるための契機にはなったはずである。

次に「目的」⑤にある、思考における「アプローチ」の方法と、授業シラバスにおける「プロセス」に関して熟考を重ねた。これも非常に重要な点である。

例えば、思考における「アプローチ」の方法という点においては、ワークシートで生徒たちに以下のような質問を投げかけた。

ワークシート

あなたの見つけた課題を解決するために、どのようなことを調べる必要がありますか。考えられるかぎりの項目を挙げてください。
[例] ① 課題が生じている社会はどのような社会なのか？
A. 人口について
B. 文化について
C. 産業について
② その課題によって社会にどのようなマイナス要素があり得るのか？
A. 人に対して
B. 自然環境に対して 等

これは、「何から思考を始めるべきか＝思考する際の〈要素〉」ということと、「どのように思考を進めていくべきか＝結論に至るまでの〈筋道〉」の端緒を示すことで「足場かけ」をしようと考えて発した問いである。

(4) 複数の情報源の活用

本授業では、生徒たちがSDGsのゴールを達成するプロセスにおいて、複数の情報源を活用して情報を得られるような環境設定を心がけた。

とはいえ週1単位の授業では、使える時間も限られており、それほど多くの選択肢はない。したがって、生徒ができるかぎり時間を有効に活用できるものとして以下の方法を採用した。

生徒が見出した社会的課題について、

① インターネット上のWebサイト

生徒それぞれが自身のタブレットを用いて必要な情報を検索し、入手する。

② 書籍

本校図書館で、その背景や問題点、対処法や解決策に関する情報を探す。

自分の見出した課題に関連する本を見つけ出し、課題の背景や原因等を調べる。

また、そこから課題を解決するための情報を得る。1冊見つけ出したら、次にその本に関連づけられる別の本をもう1冊見つけ出す、といった方法で「課題」に関連した本を複数冊見つけ出す。

③ 某社の進路指導プログラム

ある会社が提供する進路指導プログラムを活用した。

興味・関心のあることや、気になるSDGsのゴールについてWeb上で登録すると、後日、各分野の大学の先生方から、登録したゴールに関する情報が得られるというものである。

①のインターネット使用という手軽な方法だけでなく、②の書籍に触れる機会を設けたという点が、ここでの重要なポイントである。

自分の求める情報を書籍から抽出することは、手間がかかり、現代の高校生にとってはなかなかやっかいな作業である。しかし、書籍にはインターネットにはないユニークで詳細な情報を得られる可能性がある。

また、①・②に加えて③の進路指導プログラムも採

用した。これは、自分の興味・関心のある内容と、大学の学部学科における専門的な内容、そして SDGs のゴールに関する内容とを結びつけつつ検証し、考えることができるというプログラムである。(ただし、自分の求めているものと、まったく関係のない情報である可能性もある。) もちろん、得られた情報をどのように活用するかは生徒次第ではあるが、生徒の見出した社会的課題に活用できる可能性があり、本授業において有用なプログラムであった。

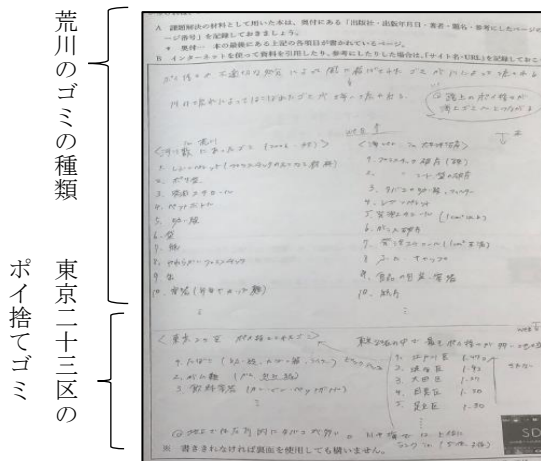
3. 成果と課題

(1) 成果

今年度、生徒たちは多岐にわたり、様々な課題を SDGs のゴールへと結びつけた。そして、社会的な課題解決に向けて思考を深めた。

各担当教員から今年度のテーマを生徒たちに伝える際、「自分の暮らす地域や、埼玉県における社会的課題、あるいは世界における社会的課題を探してみよう。」と話した。すると、多数派ではないものの、自分の生活する地域の課題を取りあげた生徒もいた。

例えば、ある生徒は「海洋ゴミ」を解決すべき課題として取りあげた。現在、日本だけではなく、世界中で話題となっている非常に大きな課題である。ただ、その生徒は「海洋ゴミ」という世界的課題を単に世界の話として捉えるのではなく、自分が暮らす非常に身近なものとして捉えた。以下に挙げるのはその生徒のワークシートである。



ワークシートの前半に、書籍から得た情報である「荒川で見つかったゴミの種類」についてまとめている。またワークシート後半には、これも書籍から得た「ポイ捨てゴミの量ランキング (東京23区)」についてまとめている。つまり、自分の生活圏と、そこに近い日

本最大の人口を有する東京のゴミとの関連性を調べているのである。

このような視点を持った生徒がいたことは大きな成果である。情報の入手しにくい県や市町村レベルの課題について、自分の求める課題に関する情報を入手し、思考の材料にしている点は素晴らしい。また、この生徒の思考のなかでは「世界レベル (マクロ・抽象)」と「身近な地域レベル (ミクロ・具体)」とが交錯しているはずである。これも、思考が深まっている証左と言える。

授業シラバスのすべてを消化したわけではないが、プレゼンテーションの準備作業の様子を見てみると、生徒それぞれが充実したプレゼンテーションを作成しようとしている。しかも、客観的に見て充実した内容のものが多い。近々開催される「プレゼンテーション大会」が楽しみである。

(2) 課題

授業シラバスが終盤にさしかかり、課題もある程度明確になってきた。その課題とは以下に示すとおりである。

① 今後も現在のコロナ禍のような状況があり得るのであれば、本校が目指す「協働型探究授業」・「双方向「対話」型授業」の実践の仕方について、より有効な方法を考えねばならない。ICT の活用はもちろん、あらゆる手段を検討する必要がある。

現在も検討している内容でもあるが、「プレゼンテーション大会」の運営方法についても非常に悩ましいものがある。できる限り感染リスクの無い環境作りが求められるからだ。ただし、このイベントが無くなることは、本授業の教育的効果が限定的になる可能性が高い。したがって、その形態を変えてでも何らかの形で開催していきたい。

② 今後も、生徒たちが身近な地域社会の課題について調べ、考えていくことを推奨するならば、彼らが十分な情報を得られるような環境作りが重要である。生徒たちが、身近な社会的課題を見出して「当事者意識」を持つようになるには、仮に市町村レベルの小さな社会であっても、そこに関する十分な情報が得られなければならない。この点についても、何らかの対策を考える必要がある。

持続可能な社会を創るために必要な力を育む～環境地図制作の取り組み～

1 はじめに

本校は、2015年に創立100周年を迎えた東京都武蔵野市にある私立小学校である。小学校から大学までがワンキャンパスに集結しており、自然豊かな環境が整った立地の中で教育活動を行っている。2019年に小学校から大学までを含む成蹊学園がユネスコスクールに認定された。建学の精神を守りながら、個性尊重のもとで、たくましい実践力を持った人間の育成を教育目標としている。

2 実践内容

(1) 地図学習の取り組み

本校は、実物に触れ観察することや、体験して学ぶ教育活動を重視している。その教育活動の一環として、環境問題に対する視点を深め、問題解決力を育むことを目的とした、環境地図を制作する地図学習に取り組んでいる。

成蹊小学校 地図指導に関連する年間指導計画

学年/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	校内探検 学校内探検	校内探検 学校内探検	校内探検 学校内探検	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究
2年	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究
3年	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究
4年	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究
5年	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究
6年	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究	自由研究 自由研究

表2 地図指導に関連する年間指導計画

この地図学習に当たっては、本校は1961年に系統的な地図指導の方針を策定して以降、読図と作図の指導を中心とした学年別の地図指導の目標や学習内容を定めている(表1)。低学年から高学年に至るまで、主に社会科の授業や総合的な学習の時間(本校ではこみちの時間と呼ぶ)を中心に地図や地図帳を活用しながら、社会的事象や社会問題を考察したり、分析したりできる力を育てている。

(2) 地図を使った授業実践

年間を通じて、発達段階に応じた地図を使った学習活動を行っている(表2)。低学年では、空間認知能力を高めることを目的とした地図学習が取り組まれている。小学校の敷地内や成蹊学園内の範囲を使ってウォークラリーを行ったり、楽しみながら場所と位置を意識した絵地図を描いたりする学習を行っている(図1、図2、写真1、写真2)



図1 秋の校内あんないマップ

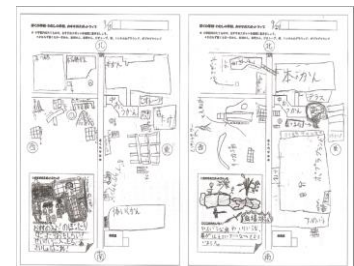


図2 校内おすすめマップ作り

学年	指導目標
1年	①身近な地形・建物・施設などの位置関係を相対的に観察・理解させる。②生活の場を中心とした範囲内で検をかくことや模型等を作り、実際の事物と対比させるとともに、読図の初歩的指導を行い、読図力の基礎を培う。③初歩的な地理的観念や地理的用語の認識と、それらの活用に関与させる。
2年	①自分の位置を中心とした位置関係の相対的把握をさせる。②事物・事象の場所的差異を直立的・断片的に捉め、その理由を自然社会との結びつきによって考えさせる。③道路や学校あるいは自分の家などを中心とした基本図を考へ、それをもとにした簡単な絵地図の制作または読図の初歩的指導を行う。
3年	①学校周辺の町や自分の住むまち、または他のまちとの共通点や相違点を比較・考察させる。②絵地図・地区図・鳥瞰図などから、平面地図を作る初歩的な力を養う。
4年	①概説(概説)の概要を地図または図表によって「理解し、さらに他地図と比較してその特色や共通点などを考察させる。②地図を見ることによって、土地と人々の生活との関係を考察し、また土地と人々の関係性を考える力を養う。
5年	①地図から事物や現象における人々の相互依存関係を把握し、その理由や因果関係を考察する。②地図を通して、事実や現象を具体的に・数值的・定量的にとらえる力を培う。
6年	①日本および世界の地図によって、自然条件と人々の生活との関係を把握し、将来の発展の姿を考へる力を養う。②各種分布図および統計図表を読み取るとともに、世界の国々との対比において、日本の姿を認識させる。

(1961年策定、2020年一部改訂)

学年	読図指導の内容	作図の指導内容
1年	①学校・家庭を中心とした模型・絵図から、学校・家及び主な建物等の位置関係を読み取る。②模型・絵図等から、主な地形・建物などを実際のものと対比して正しく読み取る。	①学校・家庭の周り、及び通学路を中心とした絵図作りの初歩的指導を行う。②具体例又は抽象例により、主な地形・建物による簡潔・模型等を作る。
2年	①身近な生活の場を中心とした模型・絵図から、地形・建物を実際のものと対比から正しく読み取る。②主な地形・建物を自分の位置を中心において、位置関係の相対的把握をさせる。	①絵地図・模型・鳥瞰図あるいは非対称な平面図作り等によって、自分たちの町や学校のある町の特性をつかませる。②地形上の簡単な方位・位置・広がり、または地形・建物の素朴な記号化の初歩的指導を行う。
3年	①絵地図・模型・鳥瞰図などを通じて、平面地図の初歩的な読図の力を養う。②主な地形・建物の素朴な記号を通じて、実際の姿を読み取る。	①絵地図・模型・鳥瞰図あるいは非対称な平面図作り等によって、自分たちの町や学校のある町の特性をつかませる。②地形上の簡単な方位・位置・広がり、または地形・建物の素朴な記号化の初歩的指導を行う。
4年	①郷土における各地域の人々の生活や、相互関係を自然条件との比較において読み取る。②日本全国により主な都市の位置を読み取る。③日本の行政図・地勢図・気候図・産業図等を読み取る。④簡単な地形・等高線・ケバ図・投影図上に地形的表現を読み取る。	①郷土の簡単な図・絵図・地形図または自地図の上に、主な地形・農産・交通・産業等の分布を示す。
5年	①地図を通して、主な地形・建物・気候的条件等を読み取る。②日本の地勢図・気候図・交通図・産業図・人口分布図等を読み取る。③それらの分布を自然や人文の諸条件との結びつきにおいて読み取る。	①日本の行政区分図をかき、②日本の地勢図・気候図・交通図・人口分布図・産業図等を描写する。③統計図表をもとにして、簡単な分布図をかき、④日本の地図・拡大図または自地図の上に、諸条件の分布を示す。
6年	①日本地図・世界地図等を利用して、読図力を高める。②世界の地形・気候図・交通図・産業図・人口分布図等を描写する。③世界の地図・自地図の上に、統計図表によって諸条件の簡単な分布を示す。	①世界の主な国々の区分図をかき、②世界の地形図・気候図・交通図・産業図・人口分布図等を描写する。③世界の地図・自地図の上に、統計図表によって諸条件の簡単な分布を示す。

表1 成蹊小学校における地図指導の系統表

3年生以上になると成蹊学園や吉祥寺駅周辺を歩き、建物や道路、お店などの情報を地図で表す学習を行う。調べた情報を視覚的に見やすく分かりやすい地図で表すことの良さや意義について実感す



写真1 フィールドワークの様子



写真2 地図を使った学習の様子

る機会としている。さらに学習では、方位や縮尺の概念も含め、地図の読み方や描き方についての丁寧な指導を行っている。

そして、3年生以上の学年から、地図に関する学習経験を生かし、問題意識の汎化を目指した環境地図の制作を行う学習を進めている。環境地図の学習は、身近な地域の環境問題に関心をもたせ、調査・分析をして地図化するという体系的な学習である。児童は選択したテーマについて、五感を使って地域を歩き、現地調査をして得られた情報を地図に表現し、地図から考察できることを中心に分析をすることで問題解決を図っていく学習となっている。地域理解に留まらず、環境問題をはじめとする地域が抱えている諸問題に具体的に関わっていく学びとなっている。そのため、教科横断的なプロジェクト型学習として本校では位置付けている。

本校における環境地図の制作に関する学習は、現段階では、主に3年生以降の児童を中心とした任意の取り組みである。地図の製作に取り組む児童は、地域の環境問題のみならず、地域の歴史的な事象や自然、生き物や文化財などに関心をもち、各自で調べるテーマを設定している。実際には、授業以外の夏休み期間などを使ってグループもしくは個人で取り組んでおり、毎年50名ほどが環境地図の制作に取り組んでいる。

テーマの設定や調査の仕方、地図に表現する方法については、社会科の教員を中心に適宜指導やアドバイスを行っている。制作された地図は全国各地で行われている地図作品展へ応募をしている。合わせて、成蹊学園のサステナビリティ教育研究センターで表彰す

るなど、児童の学習意欲向上にも努めている(写真3)。



写真3 成蹊学園サステナビリティ教育研究センターのサステナビリティ大賞表彰式

(3) 環境地図制作の取組み

私立小学校に通う児童の居住地は広範囲のため、学校のある“地域を学ぶ”のではなく、学校のある“地域で学ぶ”学習が重視される。故に、児童が自らの住む地域を調査する際に役立つ力、すなわち、見方・考え方を駆使しながら地域の諸問題にアプローチできる力を育むことが求められている。そのため、環境地図の制作は、地域を題材とした学習につながり、学校で学んだ地図に関する知識や方法を地域での学習に生かす機会にもなっている。

今年度、一学期はオンライン授業が中心だったために、地図製作に関わる学習が十分に行うことが出来なかった。そこで地図指導マニュアル(第一版)を作成した(図3)。地図の基本的な作り方や活用の仕方についてまとめたテキストとなっている。今年度は、このマニュアルに取り組む児童に配布し、参考にしながら取り組んでもらった。



図3 地図指導マニュアル



図4 くわ畑から見たむさし野れきしMap



図5 ぼくの通学路はどんな道？

(4) 環境地図の制作の学習過程

この環境地図の制作に当たって、5つの学習過程が含まれている。

①テーマの設定

児童が居住している身近な地域を調査対象として、環境に関わる問題や歴史や自然・社会問題に至るまで、各自が興味をもったテーマを設定する。

②現地調査（フィールドワーク）

各自が調べるテーマに基づいて、調査する地域を歩き、必要な情報を集める。地図に表す際の道路や土地利用の様子、ランドマークや自然・建物の情報をつかみながら調査する。

③調査の記録（インタビュー調査）

具体的な情報を収集する。例えば、市役所や公共機関に話を聞きに行ったり、設定したテーマに詳しく知っている人に直接インタビューをしたりしに行く。インタビューをすることで、調べたことの整合性や説得力が増したり、調べたことを人のいる風景をもってまとめたりすることができ、より情報を楽しく詳細にまとめることができる。



図6 こんなにあるんだ!! 足元に広がる古代のこんせき和田堀公園いせきMAP

④分析（調べたことを考察する）

収集した情報を集約し、気が付いたことや分かったこと、提案できることなどを自分の言葉でまとめる。例えば、なぜ、どのように起きたのかを考察する。分析では、調査した事象は地域のどの辺りに広がっているのか、地域によって偏りはあるのか、今と昔はどうであったかなどを考察し、さらにその理由は何かについて明らかにしていく。

⑤地図の作成（地図に表現する）

収集してきた情報を、地図でどのように表すのかを考えながら地図の作成を行う。シールやイラストを使って分布図にするなど、どのように表したら調べた結果を効果的に表すことができるのかを考える。また、視覚的な分かりやすさや情報の表し方を工夫する。例えば、集めた情報がデータ化できる場合は、グラフや表にして加工し、地図に工夫してまとめるようにする。

⑥発表（地図を使って発表する）

論理的な根拠をもった説明や発表になるように、制作した地図を丁寧に説明したものになるようにする。製作した地図は校内の各学級で行われる自由研究発表会で報告をしたり展示をしたりして、発表報告を行っている（図4、図5、図6、図7、図8、図9、図10）。



図7 私の町のカラス(スーちゃん)とゴミ集積所MAP

(5) 環境地図制作の意義

環境地図作品の制作の取組みは、どうしたら地図の好きな子どもに育てることができるのか、といった命題に対しての答えの一つになる活動である。一方、その答えの延長上には、地図を活用して問題解決をはかる学びが成立していると捉えている。つまり、持持続可能な社会の形成者として不可欠な能力を育てる学習につながっているのではないかと認識している。



図9 ひさい犬 げんちゃんのさん歩道 成城



図10 ぼくの街八王子の織物の歴史

その背景として、本校の児童は、世界各地で生じている環境問題を知っていても、身近な地域から見出せる課題や現象に目を向けようとする態度や意識の希薄さを感じさせる時がある。例えば、情報リテラシーが必要とされる昨今、児童は地域の環境問題に対するテーマに対してさえ、本や雑誌、インターネットの中だけで情報を集め、それをもとにまとめようとしがちである。座っていてもたくさんの情報が児童のもとに入るため、現地に直接出向いて人から話を聞いたりして問題を解決しようとする意識が乏しかったり、そうした考えに至らないことが多い。

身近な地域をフィールドにして、現実世界に触れながら地域の諸問題や諸事象の観察・分析していくことは、問題を真に把握し、独自の考えや主張を持つ資質・能力の育成につながっているのではないだろうか。これらは、「多様性の尊重」「環境の尊重」につながる持続可能な社会づくりに関わる態度につながっている。また、児童が地域の諸問題を分析する手段として地図活用の意義を捉え、今後も諸問題を解決するための力の一つとして認識できれば、この地図の制作の取り組みの価値は大きいと考えている。

(6) 取り組みを通じた児童の感想

地図の制作は短時間でできる活動ではなく、テーマを決めることに時間を費やし、さらには調査に出掛け情報を収集し地図を描くために時間も労力もかかる。だが、地図制作に取り組んだ児童の多くから、「自分たち

の身近な地域に対しての理解と興味を高め、自分も地域の一員であることに気づけたことが良かった」という感想が出された。実際に、自分の身近な地域ほど、知っているようで知らないことが多い。地図の制作を通して、くまなく地域を歩き調べてみることで、新たな身近な地域の魅力に出会え、知らなかった事実を知る機会につながっているようだ。その他の感想として、「現地調査を通じて出会った人たちの話は、書籍からでは分からない深い情報を集めることができ、その情報の価値に取り組みの良さを感じた」、「調べたことを地図化することが、地域の事象を調べて分析する方法として大いに有効であることを学べた」、「地域のことを正しく理解するためには、地域の歴史や自然、過去と現在、地域性や他地域との関連など、複合的な地域の要素を知ることが必要だということを、地図作りをすることで気づけた」という感想も出された。

また、これは副次的な成果であるが、「テーマに関して関係する人に話を聞きに行くと、たくさんの人が親切に話をしてくれたり教えてくれたりすることも楽しかった」という感想も出された。このことは、地図の制作や利用を通して、他者の気持ちになってものを考えたりコミュニケーションを取ったりするといった「人間の尊重」あるいは「非排他性」につながる視点を、児童に増やすことができたと言えるのではないだろうか。

3 成果と課題

地図化する力は汎用性のあるものである。他の地域や事象の際にも有効な技術・方法となるだろう。このような資質・能力や価値観は、「環境の尊重」といった持続可能かつ平和な未来に重要な力になると捉えている。

一方で課題も見られる。児童は調べたことに対しての感想をまとめることに終始しがちであり、分析結果を基にした地域への提言・提案に至らないことが多い。この課題に関しては、子ども目線で地域の今や将来を考えていく態度や、環境地図の制作を通じて地域へ参画する機会を作りたいと感じている。つまり、地域コミュニティとの連携が今後の課題となる。

次世代の人々を育成する責務を担う教員としては、地図を使って地域を分析する児童の資質・能力を高め、指導方法の在り方についても引き続き検討していきたい。身につけた力が、持続可能で幸せな未来を作ることにつながっていくのだと、児童たち自身が実感できる機会を与えることができれば素晴らしいと考えている。

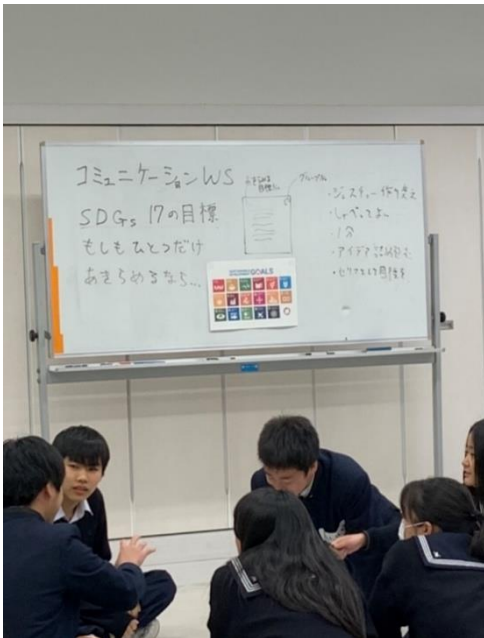
地図を使って、持続可能な地域づくりに貢献する態度を育てることができるのではないかと、その可能性を探りながら活動を始めた。今後も地図制作の学習を推進し継続していくことはもちろんのこと、ユネスコスクールとしての活動の一つとして、あるいは、成蹊学園サステナビリティ教育研究センターとしての研究活動や地域貢献の一環として活動を広げていきたいと考えている。

SDGs をあきらめた世界

1 はじめに

演劇は、与えられた設定の中で、自分だったらどうするかを考え、行動してみる体験ができます。そして、それを見る人に伝える。グループワークであれば、コミュニケーションをとりながら、自分の役割を理解して、メンバーと一緒にその空間を作り出し、見る人に伝える体験になります。

今回は、その設定として、SDGs の 17 のゴールの中から、1つをあきらめた 10 年後の世界を描くという課題に生徒たちは挑戦しました。



2 実践内容

中学 3 年生、全 7 クラスを対象とし、国語 I・II の時間を利用して、各クラス 3 回の授業が行われました。この学年は、中 1 から、文化庁の「文化芸術による子供育成総合事業～コミュニケーション能力向上事業～」(この事業では、さまざまな芸術分野の専門家が講師として派遣されます。)の採択を得られて、演劇的手法での授業も 3 回目でした。そのため、仲間と演じることの照れなどの障害は薄れ、活発に楽しんで取り組む姿が目立ちました。事前に、SDGs についてのおおよその知識は学習していましたが、それぞれのゴールの説明に終わるような発表にしたくないというのが、このプログラムを作る際に、演劇の講師の方たち

との話し合いで出された大事にしたいポイントでした。何よりも、当事者意識をもって体験してほしいという思いです。

【事前学習】

多くの生徒の SDGs の認知度は、言葉として聞いたことがある。または、カラフルなアイコンのポスターを見たことがある程度でした。冬休みの宿題として、「未来の学校を考えてみよう」という大きなテーマで、「自分たちの学校をより良くする活動として SDGs の取り組みを取り入れる際に、生徒会が 17 は多いので、1 つ外すことにしました。あなたなら、どの 1 つを外しますか。このゴールをあきらめたとき、どんな影響が世界に及ばされるか想像してみてください」という内容のレポートを出しました。冬休み中に、インターネットなどで SDGs について調べた者もいたようですが、出てきた意見としては 2 つの傾向がありました。

〈その 1〉成蹊中学校の環境から考えて、海は関係ないので 14「海の豊かさを守ろう」や、成蹊に通うことができる家は経済力があるはずだから、1 の「貧困をなくそう」、2 の「飢餓をなくそう」を外すというものが多くありました。怖い結果です。

〈その 2〉飢餓は貧困がもとだから、2 は 1 に吸収できる、13「気候変動に具体的対策」、14「海の豊かさを守ろう」、15「陸の豊かさを守ろう」は「自然を守る」で 1 つにまとめられるから、分ける必要がないという考えも出されました。17 という数の半端な印象、数の多さや、なぜその 17 なのかについての疑問が示されました。

こうした生徒達から出された結果を踏まえて、どう演劇のワークショップに組み入れてゆくか、当初のものに変更を加えて、講師陣と今回のプログラムを作りました。

【1 時間目】

グループは男女混合の 7、8 名の 5 グループに分けました。5 月に行われた、修学旅行の班をベースにし

ました。これは、グループ内での人間関係による進行の障害を少なくし、3回という限られた時間の中で、課題に集中してほしい。また、50分の授業内で発表まで進行する際に可能なグループ数として考えた5グループでした。発表は90秒、長めのCMをイメージ。発表についての講師のコメントを含めて4分程度で計画されています。

グループ全員が何らかの役割をもってクラスのみんなの前で演じて見せる、そのウォーミングアップとしてのジェスチャーゲームから始まりました。1年ぶりの演劇のワークショップ。講師の方々も久しぶりだねという雰囲気もあって、警戒心や不要な緊張感もなく始められました。

お題は自分たちで考えることにしました。そのため、演じやすく、その時の話題になっていてわかりやすいものを取り上げるグループが多くありました。みな楽しく演じ、見物し、お題を当てることに盛り上がっていました。ウォーミングアップとしても効果的でしたし、こちらが意図していたSDGsとは全く関係ないお題を選んでほしかったことにもうまくかみ合う結果となりました。



SDGsとは全く関係なくジェスチャーのお題を考えたので、「桃太郎」「バスジャック」「出産」「歌舞伎町」「クリスマス」「M-1」「ラグビー」「動物園」「箱根駅伝」「サーフィン大会」(写真一人をサーフボードに見立ててみる-)など、さまざまなお題が出されました。7クラス、35作品。ほとんど重なる内容はありませんでした。面白かったのは、お題を説明する一場面を演じればよいのですが、ストーリー性や、構成にこだわり、無言で演じなければならぬので、時間や場面が変わったことをいかに身体表現で説明するかに苦労しているところでした。物語を作ろうとしている点、生徒たちの演劇を作ろうとしている意識の表れなのかと思って面白く見ていました。

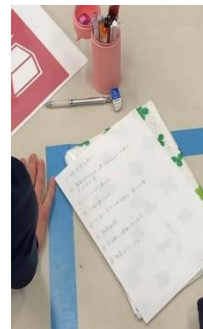
「オリンピック」をお題にしたグループは、6人が協力して聖火台の燃え上がっていく炎を身体で表現

して、そこには感心するような工夫も見られました。もちろん、照れてやりにくそうにしている者もいましたが、短時間での作業でも、よく話し合いにのって各々が自分の役割を理解して、発表に参加して演じていました。これは、中3の三学期で、お互いに受け止め合える関係性があるからこそだと思います。3年間の継続によって見えてきた成長の姿です。

【2時間目】

いよいよSDGsに触れる授業となります。事前学習の様子から、準備されたもので発想すると、17のゴールから外したものがいかに大切かを説明するだけのものになるだろうと考え、外すゴールはアトラダムに講師が各グループにその場で与えることにしました。こちらで用意したカードは、2「飢餓をゼロに」3「すべての人に健康と福祉を」4「質の高い教育をみんなに」5「ジェンダー平等を実現しよう」6「安全なトイレと水を世界中に」の5つ。

何が当たるかドキドキする、このドキドキはこうした取り組みに興味をもって参加してゆく大切な要素になっていました。



まず、配布された紙に、与えられた1つの目標をあきらめた場合に予測される影響を思いつくままに書いてゆきます。事前に調べたことを丸写しにはできません。身近なものから、世界的な視野まで、次々と箇条書きにできる者から、2、3行で手が止まってしまうものなど、日常の意識・関心の度合いがはっきりと現れて、周囲のペースに乗り遅れてしまう者もいました。講師のフォローがあることで、少しずつ視野が広がった者もいましたが、38人に3人の講師では漏れが出て難しい局面もありました。



活動の様子を見渡すと、アイデアを出す、書記としてまとめるなど、場面ごとのリーダーがどのグループ

にも育っていて、意見の共有とまとめは予想以上にスムーズでした。

1つのゴールをあきらめた10年後について、各グループのアイデア出しが終わった、このタイミングで、さらに新たなミッションが課せられました。今、グループごとにまとめた状況を、前の時間に作ったジェスチャーゲームの劇に盛り込むという課題が出されました。生徒の多くは、そんな無茶ぶりだよ、と困った表情。SDGsとまったく無関係に考えたお題に、どう結びつけるか、火事場の馬鹿力ではありませんが、ひらめきと決断力が求められます。意見を出しながら、アイデアが次々と飛び出すグループ、誰かが投げたボールを誰も拾わずに、アイデアのボールが散乱しているグループとさまざまです。中には、グループ崩壊の危機にさらされて、壁に額をこすりつけて悩むリーダーや、ぐいぐいと自分のアイデアを出して台本を作り引っ張って行くリーダー。こうしたリーダーを作り出してしまふ原因は、当人のキャラクターによるだけではなく、大きくは当事者意識を持ってない班員である自分たちが作り出したものだと、小さな失敗の中で気づいてゆきます。コミュニケーション能力を育成するというそもそもの事業の目的から考えると、こうした体験の継続が生徒の力を育てていると実感されます。



いろいろ意見を出してゆく中で、設定を決めてゆきます。まずは、もし、そのゴールがなくなったら、どんなデメリットがあるのか、困った状況にいる人物を設定するところから考え始めます。上手な演劇を目指したり、面白い作品を作ったりすることが目的ではありません。自分たちが考え出した設定の中で、自分たちが登場人物として生きてみる体験をすることです。安全な水やトイレのない世の中で、映画の撮影現場は？学校生活はどうなってしまうのか、行動してみることで、SDGsのゴールがどのようなものか、なぜ17の目標が掲げられているのか、その理由がなんとなく自分事として見えてきたところで、2時間目は終了とな

りました。



【3時間目】

いよいよ発表の時間です。前半の20分は最終確認と練習です。すぐに立ち稽古にはいって、何度もシーンを繰り返し、完成度を上げていくグループ、円くなって座ったまま、まだアイデア出しに時間を取っているグループと、スタート時点では差が出ていますが、講師のアドバイスも入って、練習の後半は実際に動きながら、アイデアをすくい上げてシーンがまとめられていきました。

発表に際しては、観客として見る生徒の姿勢がとてもよかったことがまず挙げられます。自分たちの打ち合わせに費やすのではなく、他のグループの発表を愉しみながら、笑いと拍手をもって、見ることができたのは、発信者と受け手との双方のコミュニケーションが図れていると感じました。

SDGsの授業として見た場合、その発想のおもしろさや、無関係に作り出したジェスチャーゲームのお題にSDGsの要素を絡めてゆく機転には感心させられるものが多くありました。ウケ狙いの悪ふざけになることもありません。一面的ではなく、1つのシーンで、対立する世界を同時進行で見せたり、いろいろな工夫がされたりしていました。



2時間目でシーンを考えていく際に、うまく進行していたクラスでは、中間発表のような場面を設けることができました。そこで、演じられた場面から、生徒たち自身が作り出した登場人物の設定の多くに、ゴー

ルの1つをあきらめた結果、被害を受ける人と、被害を受けない人、それどころか、その状況を利用して利益を得る人たちの対比が見えてきました。そうした対比を意識して設定づくりを呼び掛けてみると、さらに考えが深まり、面白いことに、2つの対比だけではなく、何にも変化しない人たちを登場させていて、一つの場面をいろんな立場、いろんな視点で見ることができていると思う発表がありました。



—作品例—

「桃太郎」と「質の高い教育をみんなに」をあきらめた世界

質の高い教育を受けている鬼の家族のもとへ、鬼退治にやってくる十分な教育を受けてこなかった人間代表の桃太郎たち。風刺のきいた作品でした。

「ラグビー」と「ジェンダー平等を実現しよう」をあきらめた世界。

ラグビーの試合で、女性審判員の登場に観客からのブーイング。男女で座席料金設定が違うなど。印象的だったのは、「ラグビーは男のスポーツだ!」という一言で、当たり前のように性差別が行われていることを描いている点でした。

「バスジャック」と「安全なトイレと水を世界中に」をあきらめた世界。

ペットボトルの水を飲む裕福な乗客を狙って水を求めてバスジャックをした犯人たちは、警官に取り押さえられる。刑務所に収容され、そこでの収容者へ配給される不衛生な飲料水によって死んでしまう。

「動物園」と「飢餓をなくそう」をあきらめた世界。

餌を奪い合い、殺し合う動物たち。その死骸を売る飼育員、その飼育員を襲う猛獣。動物園から100g何万円もの大金を払ってラインオンの肉を買い、夕食を楽しむお嬢様。

「箱根駅伝」と「すべての人に健康と福祉を」をあ

きらめた世界。

2人のランナーが走行中にケガをして倒れるが、ランナー自身が携帯電話で救急車を呼び、値段交渉をする。多額の救援料を支払って搬送されるランナーと、お金が払えないためにその場で悔し泣きに叫ぶランナー。「なんで、こんな世の中なんだ!」と地面をたたいて終了。

他にも、ユニークな発想で、最初に自分たちが作った世界に、SDGsの要素を工夫しながら絡めていった作品が次々と並びました。

終わりがどこかはっきりしない、どう終わらせるかわからず悩む様子が目立っていたので、最後に、あきらめたゴールを言って終了という形式にしました。そのことによって、あきらめたはずのゴールについて、その大切さが見えてくる90秒CMのような結果となりました。

生徒たちの柔軟な発想や、普段の教室では見られない表情に終始、こちらも顔の筋肉が緩んでいたような気がします。駅伝の場面で、叫ぶ熱演に大きな拍手と笑いが起きました。用意されたセリフなのか、その場の勢いでのアドリブであったかはわかりませんが、次々と生徒たちが演じて見せる世界は、まさに「なんで、こんな世の中なんだ」というものばかりでした。笑いの絶えない授業ではありましたが、しかし、愉しんで笑いが起こる一方で、これは笑い事ではないぞというものばかりでした。よくよく考えてみると、ゾッとする世界を自分たちはシーンとして作り出しているのです。作っているときは夢中になっていて後から気づくことが多くありました。1クラス、5グループの発表のうち、多くのグループでは必ず誰かが死にます。生き物の命が奪われます。結果としてSDGsが命に直結していることを実感する授業となりました。そして、経済力、お金の力によって、世界が二分されている、もし現実の自分たちの身に起こったら、怖い世界であり、恵まれた環境で生きているからこそ、安全に暮らせていますが、現実に死に直面している世界が今も、自分たちが生きている同じ時間に存在していることを実感できたようでした。

3 成果と課題

【ワークショップ後】

3時間の振り返りと、この体験からSDGsについて

考えたことを作文にしました。深い浅いの違いは個々にありましたが、このワークショップの体験で、SDGsについて、当事者意識を持って考えることができるようになったという感想がでてきたことは、大きな成果ではなかったかと思えます。

事前学習のアンケートで出てきた結果は、それぞれのゴールが満たされて、自分たちの生活に不安を感じていないからこそ出てきたものです。自分たちが演じた世界の中に、いろいろな立場の人たちが出てきましたが、現実の中で、自分ほどの立ち位置にいるのか考えてみるきっかけになったようです。今の豊かさや、安心を持続可能にするのは自分たちであること、当たり前が当たり前でないことに気づけるきっかけになった時間でした。

このワークショップを終えて、数週間後にコロナの感染者がニュースで報じられ、一か月後には休校となり、学年末試験もなくなり、卒業の思い出となる行事もみな中止になり、自分たちの卒業式も、かろうじて感染対策を施した講堂で、短縮版として実現できたことに深く感じ入っていた生徒たちです。生徒たちが生まれた時から当たり前享受してきた安定した生活は、自然に生まれたものではないこと、そのことに、今のコロナ禍で、思い出してくれていたらと思います。

2020年度も中学3年生を対象に、このワークショップを企画していましたが、実施する一週間前に緊急事態宣言を受けて、身体接触を伴う活動、少人数でのグループワークの授業での制限が決まり、実施は困難と判断して中止になりました。



今回の学年は、2学期にターゲットアイコンのコピーを考え、SDGsについて学習をし、そのまとめとしての位置づけだったので、とても残念です。

演劇は、演じ手が考え行動し、それを見る人に伝え、その反応を通じて、自分がどう見えているのかあらためて知るという体験でもあります。

演じる人、見る人、一緒に場面を作る仲間たち、集団で体験を共有することになります。

知識としてのSDGsから、想像の世界ではありますが体感できるSDGs。

しかし、今のコロナ禍においては、グループワークでの体験の共有の形に変更を求められました。これが、この授業の今後の大きな課題となるでしょう。リモートでできるグループワーク、身体を動かすことによって生まれる感覚をどうしたら伝え合えるか。

また、このプログラムを作る過程で、難しいと感じたことは、演劇の専門的な技能と、SDGsについての広い知識・理解の必要性でした。SDGsを演劇にしたときに、説教臭い道徳的な押し付けにならず、生徒たちが好奇心をもって愉しみながら気づいてゆけるものにならないと、生徒自身の中で持続してゆかない体験になってしまいます。

今回の報告例は1年からの演劇でのグループワークの下地があって、スムーズにいったところが大きく、男女共同、人前で演じるというコミュニケーションは中学生には高いハードルです。それを乗り越えさせる導入がとても大事だとこれまでの経験から痛感しています。ただ、これはこの授業だけの問題ではなく、普段が大事で、SDGsの問題も普段が大事なのだと思います。その意識づけのきっかけとして、このプログラムが役立つようこれからも改良しながら継続してゆきたいと考えています。

ベストアクティビティ賞

北海道羅臼町立羅臼小学校

教頭 佐藤博康

持続可能な社会づくりに取り組む児童の育成 ～「知床学」(海洋教育)を中心とした教育活動～

1 はじめに

本校のある羅臼町は、世界自然遺産「知床」の中心に位置し、東西を山と海に囲まれた自然豊かな地域にあり、この豊かな自然を生かした漁業と観光業が主産業である。その町の中心部に位置する本校は、児童数130名と小規模な学校である。

2年前の児童アンケートで、「羅臼が好きですか?」の項目に「そう思わない」とする回答が過半数を超えていた。この状況を改善するために、羅臼の良さが実感できる本物に触れ、良さを感じ取る学習を行った。子どもが、人・物・自然とつながり、知をつなげ、相互で協力する能力を高め、一人ひとりが地域に支えられていることを知ることで、将来地域に貢献できる大人へと成長していけると考えた。

本校では、各教科との関連を図りながら、地域の教育資源を活用し、「ふるさと羅臼」を包括的にとらえる「知床学」(海洋教育)の学習を通じ、SDGsの17の目標を重点に総合的な学習の時間を展開した。

17の目標の中では、特に「8 経済発展と働きがいのある仕事」、「9 産業・技術革新・社会基盤」、「11 持続可能なまちづくり」、「14 海洋資源」、「15 陸上資源」を学習対象としたESDを展開した。(資料1)

2 実践内容

(1) 知床の人・物・自然からの学び

専門的な知見をもつ羅臼漁業協同組合職員、知床財団職員や漁業を生業とする保護者を講師として招き、児童が直接体験を通じて本物を学ぶことができるようにした。地域住民が児童の学びを支え伝えようとする姿は、子どもたちの真剣な学びにつながり、地域のすばらしさを実感することができた。

具体的な学習として、第1・2学年では、幼稚園からの学びをつなぎ地域の自然や仕事について活動を通して学ぶ。

特に第2学年では漁協・地域住民から鮭の生態や稚魚を放流する意味について説明を受け、3年後の回帰を願い稚魚放流を行った。この学習を通じ、児童は鮭の生態について学ぶだけでなく、羅臼

の自然の豊かさや地域の方の行動からより「ふるさと羅臼」に対する思いを強くもち、3年後の回帰する鮭の有効活用～鮭フレーク作り～につなげ、海の豊かさや大切さを実感することになる。



羅臼川での稚魚放流



漁協の協力のもと行われた鮭フレーク作り

学習を終えた子どもたちからは、「鮭が帰って来るのが楽しみ。」という感想だけでなく、「鮭がきちんと羅臼に帰ってこられるように川や山をきれいにしたい。」という声が聞かれた。

第3・4学年では、低学年での学びをもとにして、地域の自然や産業について自ら課題を設定し、地域の方へのインタビューや本・インターネットを活用した調べ学習を行い、課題を解決した。

第3学年が行う生き物調べの学習では、知床財団職員の方の講話やインタビューから羅臼の生き物図鑑を作成した。この学びでは、自ら課題を設定し解決する力を伸ばすだけでなく、様々な人との対話を通じてコミュニケーション能力の基礎を育むことができた。

第5学年では、羅臼昆布を題材として地域の産業について総合的に学ぶ学習を行った。この学習を通じ、地域住民の郷土の産業を大切にしている

考えに触れて、「羅臼の海がすごいということを改めて感じた。」「地域の人たちが守ってきた海を自分たちもしっかりと守りたい。」などの感想をもつことができた。



漁協職員から漁の説明を受けた市場見学

第6学年は、これまでの学習で学んできた羅臼のよさを行動とともに発信する活動につなげた。「羅臼に残したいもの」をテーマに学習を進め、ふるさとを多角的に捉えようとする態度を育むことができた。

このような地域の人・物・自然から直接体験を通じて本物を学ぶことを、6年間を通じて系統的に構成することで、児童がこれからの社会を生き抜くために必要な力を高めることができた。

(2) 地域の良さを実感

全学年の児童を対象に、直接体験を通して学ぶ「羅臼探検隊」を組織した。羅臼川を主な活動場所として、川遊びや魚取り、ゴミ拾いなどを行った。また、川に鮭が遡上する季節には、鮭の定置網の水揚げの様子を見学するなどの活動を行った。

この組織は、地域住民や大学生などが子どもたちの活動を支え、一緒に直接体験を行う。児童は、直接体験から様々な学びを行うだけでなく、一緒に参加し活動する中で、よりくわしく地域のすばらしさを知ることができた。

さらに児童は、活動に参加する大人の姿から将来自分が地域住民の一員として、地域のために活動する姿を考える機会になっていた。



羅臼川でのゴミ拾い活動



親子での川探検

(3) つながる「羅臼昆布図鑑」の学び

これまでの各教科や総合的な学習の時間の学びで身に付けた力をもとにして、第5学年では羅臼昆布を題材に学習を行った。児童一人ひとりが自らの課題から、自然環境、宣伝・商品開発や昆布業などのグループを作り、実験や調査を通し課題解決を行った。



どんな昆布図鑑にしたいのかのブレインストーミング

そしてそれぞれのグループのまとめを1冊の「羅臼昆布図鑑」として刊行し、外部に発信した。



全国海洋教育サミットでの「羅臼昆布図鑑」

地域のユネスコスクール発表会や全国海洋教育サミットに参加し、地域住民の方たちと意見交流をしたり、全国の小中高生と交流したりすることで、地域の素晴らしさを再発見することができた。

また東京での海洋教育サミットでは、東京羅臼会の方々からの温かい応援を受け、地域を離れても羅臼を大切にする思いに触れることができた。



全国海洋教育サミットでの「羅臼昆布図鑑」

これらの学習を通じ、児童は羅臼昆布についての知識をもつだけでなく、昆布という題材を通し、学びのつながりの中でより地域への愛着を深め、自分が大人になったとき、地域を支えようとする気持ちを育むことができた。

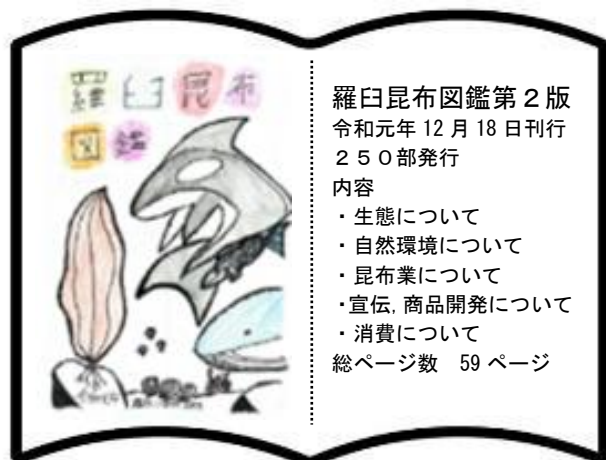
さらには、様々な方との対話・交流からコミュニケーション能力を伸ばし高めることができた。



昆布漁師さんによる羅臼昆布の出前授業

これらの学びの深まりと共に、課題を自分で見つけ、解決する意識が高まり、合わせて主体的に行動できるようになった。

さらに子どもたちの「羅臼昆布図鑑」での学びが、次の学年の教材として生かされ、受け継がれより深化している。



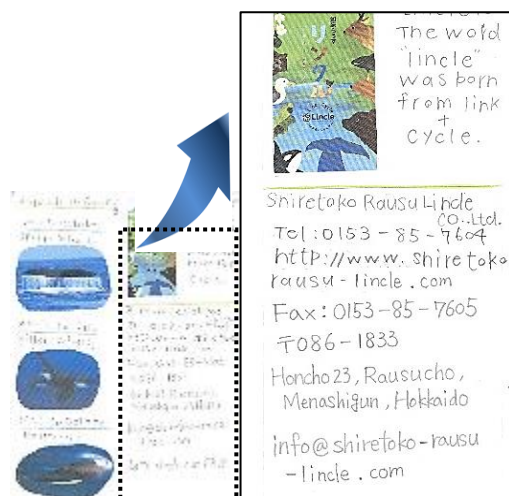
授業後の子どもたちの反省として、羅臼昆布の素晴らしさを知るだけでなく、「地域の方からたくさんお話を聞けて、みんなが羅臼を大切に思っ

ていることを知ることができた。」、「羅臼昆布だけでなく、ふるさと羅臼をもっと大切にしたい。」等の意見もみられるようになった。

(4) 「ふるさと羅臼」を守る活動へ

第5学年までの学習を通じ、羅臼のよさや課題を捉えた第6学年は、「羅臼に残したものを」をテーマに活動を行った。

リーフレットやポスターを作成し発信するグループ、ボランティアを募り地域の温泉の清掃活動を行うグループ、地域芸能をインターネットで発信するグループ等をつくり、それぞれが魅力を伝える活動を行った。



児童が作成した英語版リーフレット

リーフレットを作成したグループは、町内の各所に作成したリーフレットを配布して、観光客の中には外国の方が多くいることに気づき、英語版や中国語版のリーフレットの作成を行った。

温泉の清掃ボランティアを行ったグループは、作業後「作業はとても大変だったけど、この温泉をずっと羅臼に残したい。」と話していた。



瀬石温泉の清掃ボランティア

6年間の活動で、一つの気づきを次の学びにつなげ発展させることができるようになった。また具体的な

活動を企画し行動することを通して、協働する喜びややりがいを実感する学びとすることができた。

最近、地域で遊びながら、犬の散歩をしながらゴミ拾いを当たり前に行う子どもたちの姿が日常的にみられるようになった。

3 実践の成果と課題

(1) 成果

① SDGs の考え方を取り入れ学習をすすめたことで、児童が地域社会の一員として、地域を守っていくことの大切さとどのように行動すれば、よりよい方法で地域を持続させていくことができるかを考えることができるようになった。

② 2年前の児童アンケートで「羅臼が好きですか？」の問いに対し「そう思わない」と回答した児童が半数以上であったが、今年10月に第6学年児童に行ったアンケートでは100%の児童が「羅臼が好き」と回答した。

その理由として「自然が多く、たくさんの生き物に囲まれ、町民一人ひとりがやさしいから、羅臼は私の自慢のふるさとです。」と書かれた回答があった。これが実践の成果だと言える。多くの地域住民に協力していただきながら学習を行ってきたことで、より深くふるさについて知り、郷土に対する誇りや愛着をもつ心を育むことができた。

③ 人や物との出会いを通して、自らの生き方を考えることができ、将来自分がどのような職業を選択し、どのように学びを将来につなげていけばよいか考える機会とすることができた。

(2) 課題

社会の形成者として、一人ひとりの子どもにも自覚を促し、自分のできることを確実に行動にうつしていくことのできる力を身に付けさせたい。そのためにも継続して取組を行う必要性を感じている。また、学校内の組織はもちろん、地域社会が子どもの育ちを支えるための外部組織を整備する必要がある。

資料 1

資料 1 「知床学（海洋教育）」 <令和2年度>												羅臼町立羅臼小学校							
学年	幼稚園	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3						
FSD	ユネスコスクールに認定され、FSD (Education for Sustainable Development) を推進しています												【FSDの意味：持続可能な発展のための教育】						
学びの主体性	知識伝達や体験から												自ら考え行動する学習活動へ						
学びの主体性	In Nature (知床) 自然(知床)の中で体験、感じる												About Nature (知床) (自然について多くを知る)						
学年別実践課題	In 知床	About 知床				For 知床				In 知床	About 知床	For 知床							
・身近な動物に関心をもち、ふるさとの自然のすばらしさを感じる	・地域のよきや自然のすばらしさを知り、愛着をもち、地域の良さを誇りに感じ、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ	・羅臼の自然、生態、文化などに関心をもち、地域の文化や暮らし、まごめや稚魚を通して将来の夢や希望を持つ						
総合的な学習の時間	実地内容	クマ学習・外来種学習を通じた環境教育												【知識伝達・体験 → 安全管理 → 調査方法・実習 → 共存環境の持続性】					
・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習	・クマ学習						
海洋教育	・身近な動物に関心をもち、ふるさとの自然のすばらしさを知る	・身近な動物や自然を知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る						
自然環境教育	・身近な動物に関心をもち、ふるさとの自然のすばらしさを知る	・身近な動物や自然を知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る	・知床の自然のすばらしさを知る						
その他	ユネスコスクールの活動	ユネスコスクール研究発表の活動												ユネスコスクール研究発表の活動					

スタートアップ賞

八千代市立大和田南小学校

校長 田中一成

社会に開かれた教育課程

～人・関係機関等とのつながりを生かして子どもを育てる～

1 はじめに

令和元年は、5月にもかかわらず気温が30度を越し、熱中症対策を余儀なくされた。また、9月9日千葉県に上陸した台風15号は、過去最強クラスの勢力で停電や断水など県内に大きな被害をもたらした。地球温暖化の影響で気候が変わり、世界中で自然災害も多発した。

令和2年は、新型コロナウイルス感染症が子どもたちの学校生活を、そして、これまで親しんできた常識を根本から塗り替え、新しい生活様式に移行せざるを得ない事態を引き起こした。

この他にも、世界に目を向けるとたくさんの問題が起きている。今、こうしている間にも紛争が起き、貧しくて学校に行けない子どもたちが大勢生まれている。地球の環境も悪化の一途をたどり、多くの動物や植物が絶滅の危機にさらされている。

これらの問題を解決するには、一人の力ではできない。しかし、小さな力でも世界中のみんなで力を合わせれば大きな力に変わる。



平成30年度本校が加盟したユネスコスクールは、世界の子どもたちがつながり「知恵と行動」で小さな力を大きな力に変える学校である。

ユネスコスクールへの加盟は、ゴールではなく、世界とつながる第一歩だと考えている。

本校は、開校以来、生活科と社会科の研究に取り組んできた。令和元年度からは、これまでの研究教科で

ある生活科、社会科に加え、総合的な学習の時間、交流及び共同学習、イマージョン学習の研究に取り組み始めた。

何事もそうであるが、今まであるものを変えず、同じように行えば失敗することも少なく、比較的容易に取り組むことができる。しかし、それではたくさんの課題を抱える厳しい時代を自らの力で切り開いて生きていく「生きる力」は育たない。

私たち教育に携わる者は、2015年国連のサミットで「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性(ほうせつせい)のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標を達成するための次の社会の担い手である子どもたちを育てていかなければならない。

2 実践内容

(1)「学校の教育目標」の再点検

カリキュラム・マネジメントを効果的に進めるためには、何を目標として教育活動の質の向上を図っていくのかを明確にすることが重要である。新学習指導要領の施行に伴い、本校の教育目標である「世界に生きる」をキーワードとしたグランドデザインを次の4点から再点検をした。

- ①「持続可能な社会づくり」の視点が含まれているか。
- ②地域の実態や、目の前の子どもたちの個性や持ち味に基づいているか。
- ③「社会に開かれた教育課程」の理念をしっかりと踏まえているか。
- ④「全国学力・学習状況調査」の結果を踏まえたものとなっているか。

(2)カリキュラム・マネジメントを充実するための組織作り・学校づくり

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学校は、新しい生活様式を取り入れるとともに、学習内容や活動内容を工夫していく必要がある。

そのために校務分掌を見直し、各教職員を適切に配置して役割分担を明確にすると共に、相互の関係性を明らかにして協力体制を推進する組織となるように改善を図った。

(3) 教科等横断的な視点での教育課程の編成

社会科や国語科などそれぞれの教科がバラバラに授業をしては、これからの時代に必要な能力が育たない。各教科が足並みをそろえて授業を行う必要がある。しかし、ただ単に各教科が足並みをそろえるのではなく、コンテンツ・ベース(内容:知識重視の教育)からコンピテンシー・ベース(能力:資質・能力を育成する教育)への転換を意識したものでなければならない。すなわち「何を教えるか」から「何ができるようになるか」という転換を図られなければならない。

本校では、コンピテンシー(能力)による教科等横断を図るために、全学年ESDカレンダーを作成し、国際理解教育への取組を中心にしながらも、各学年に合わせた実践を計画的に組み立てた。教育課程を通じて全校で取組を進め、6年間を通して子どもたちを育てている。

第5学年 ESDカレンダー

教科	4年	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4年
国語													
算数													
理科													
社会科													
外国語													
音楽													
体育													
家庭科													
芸術													
外国語													
学級活動													

(4) 実践を可能とする資源(人・金・物・時間・情報)の確保

ユネスコスクール加盟の最大のメリットは、ネットワークを活用し、人とのご縁を生かしながら地域に、そして、世界に開かれた教育課程づくりを進められることである。

ネットワークを生かし、外部人材を積極的に活用することにより、教員にはない専門的知識・技能が学習でき、キャリア教育にもつながる。

【3年 ESDめがねをかけて考えよう!】

五井平和財団や生活科教育研究会とのつながりをきっかけに、横浜市のユネスコスクール等とつながりをもつことができ、新しい単元開発につなげることができた。生活科から総合の学習がはじまる3年生において、ESDの視点をもって物事を見ることができる力をつけさせるための単元「ESDめがねをかけて考えよう!」はその成果の一つである。



【4年 “届けよう、服のチカラ” プロジェクト】

4年生では、(株)ユニクロが行っている“届けよう、服のチカラ”プロジェクトに取り組んだ。

取組をはじめた当初は、校内だけでの活動であったが、2年目からは、近隣の大和田中学校、大和田小学校、大和田西小学校や学区内の幼稚園、自治会などにも協力を呼びかけた。

活動の輪は年々広がり、1年目は5,000枚だった服が、3年目は、12,184枚の服を集めることができた。地域社会と連携することにより、活動に広がりが出てきた。



【5年 ベトナムとの国際交流活】

5年生で取り組んだベトナムタイビン省の学校と「米を使った食文化」という共通テーマのもとに行った国際交流活動では、ベトナム大使館とのつながりがある市内の小中学校やベトナムと取引のある(株)オカムラホーム、地域のコミュニティーラジオFMふくろうとコラボをして進めた。現地にネットワークがある

民間企業の力を借りることができたからこそ実現できた取組である。



【5年 子どもと海のSDGs】

5年生の社会科に水産業について学ぶ単元がある。そこで、「海」を切り口にSDGs14番目の目標「海の豊かさを守ろう」について学んでほしいと願い、「子どもと海のSDGs～SDGsってなんだろう」という授業を計画した。



この授業は、日本財団「海と日本 PROJECT」の一環として、朝日小学生新聞、日本ESD学会の協力のもと行われたものである。講師には、日本ESD学会副会長でもあり、ユネスコスクールの第一人者でもある手島利夫先生と科学ジャーナリストでもある朝日新聞社の山本智之様をお迎えした。

SDGs17の目標は10年後の姿を示している。子どもたちは、この学習を通して「未来の目線で今を見ることが出来るものの見方」について学ぶことができた。

【6年 アートマイルプロジェクト】

6年生では、国際理解への取組として一般財団法人ジャパンアートマイルが行っている「アートマイル国際協働学習プロジェクト」に取り組んでいる。これまで、エチオピアやアゼルバイジャンと協働して壁画を完成させてきた。

今年度は、「コロナが広まる中、SDGs達成のためにできることは何か？」というテーマのもと、ギリシャ

と壁画の制作に向けて取り組んでいる。

〈ギリシャへのビデオメッセージ〉



【クラブ活動 オリジナルドレッシング作り】

一度構築されたネットワークは、次の新たなネットワークを生み出し、更なる広がりを見せる。

クラブ活動では、FMふくろうの協力を得て、市内に店舗のあるフランス料理店のシェフをお招きし、ドレッシング作りのワークショップを行った。



地元八千代の野菜のおいしさ、野菜を食べることの必要性をワークショップ形式で学びながら、子どもたち自らオリジナルのドレッシングを作り、野菜×ドレッシングをおいしく食べて、楽しく学ぶ学習を企画できた。

日本は、海に囲まれた島国であることに対し、フランスは、ベルギー、ドイツ、スイス、イタリアなどの国と隣接しており、それらの国々の食文化の影響を受けているそうである。

シェフからは、単にマヨネーズの作り方を教えてもらうだけでなく、フランス料理の成り立ちや特徴などフランスの食文化についても教えてもらうことができた。ドレッシング作りを通して、国際理解教育つなげることができた。

(5) 英語を国際交流のツールとして活用

現在、学校で学んでいる子どもたちが社会に出て活躍するであろう2050年頃には、日本は、多文化・多言

語・多民族の人たちが、協調と競争をする国際的な環境の中にあることが予想されている。

英語は、海外のユネスコスクールとつながるためのツールの一つである。本校では、子どもたちの英語力を高めるために、全学年でイマージョン学習に取り組んでいる。

<5年 家庭科 小物づくり>



本校が目指す英語学習の最終的なゴールは、ユネスコスクールとして行う6年生の国際交流学習である。英語を「手段」として活用し、外国の学校と国際交流を行っている。

上記の写真は、学級担任がイマージョン学習で家庭科を行っているところである。45分間、指導者が発する言葉はすべて英語である。子どもたちは、英語を耳で聞き、その様子を目で確かめ、どんな活動をすればよいのか理解している。

(6) 共生社会の実現を目指しての取組

本校では、特別支援学級と通常の学級との「交流及び共同学習」を通して、小さい頃から違いはあっても誰もが同じように学び、働き、生活し、支え合う共生経験を増やす取組を進めている。

いろいろな人がいて当たり前と思える、いろいろな友達のよさや特性を認められる、お互いに歩み寄る努力ができる、といった「共生」の理念が自然な形で定着するよう実践を積み重ねているところである。誰もが、共生社会で社会貢献するためには、子どもたちに、障害があろうとなかろうと、今、自分にできることに一生懸命取り組む「実行機能」を身につけさせる必要がある。その基本には、自分の役割があり、果たした役割が認められ、評価される経験の積み重ねをしていかなければならないと考えている。

平成30年度は、えがお学級と6年生が交流学習を行い、令和元年度は、3年生と季節行事を通して交流

学習を行った。

令和元年度の3年生との交流では、ESD(持続可能な社会に担い手を育む教育)の4つの視点「見直す・つなげる・変わる・ひろげる」で日本の伝統行事を捉えて学習を進めてきた。



1学期は「七夕まつり」を計画した。3年生の子どもたちは、「七夕って何?」「いつからあるの?」という素朴な疑問から調べ学習へと発展し、図書やインターネットを使いながら日本の伝統文化への興味・関心や知識を高めていった。当日は、寸劇を交えて調べたことをわかりやすく発表した。

今回、えがお学級と交流学習を行ったのはひとクラスだったが、他の3年生のクラスも同じように学習を進め、7月に5年生を招待して交流活動を行った。

2学期は、「いっしょならもっとたのしい! スペシャルしゅうかく祭」を計画し、体育館でやぐらを組み、秋祭りのように行った。



3学期は、「いっしょならもっとたのしい! スペシャル豆まき」を計画し、節分にちなんだ劇や豆まきを行った。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、交流活動ができなかった。交流学習を通して障害の有無にかかわらずだれもが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現を目指していけるように、新しい生活様式の中での交流学習を考えていか

なければならない。

(7)教育実践の質の向上のためのPDCAサイクル

PDCAサイクルがうまく回るかどうかは、適切なCheck(評価)と現実的なAction(改善)にかかっている。

Check(評価)を行う際は、全国学力学習状況調査や本校が毎年行っている学力検査など数値的指標を基準として、具体的な検証作業を行う必要がある。「だいたいできています」「こんな感じで進めればいいと思う」など抽象的で曖昧なチェック基準では改善へとつながらない。

Action(改善)を行う際は、改善に向けて、可能性のあるものは全て試してみる。また、改善に向けて取り組んでもうまくいかない場合は課題自体の見直しも視野に入れる必要がある。

本校では、現在3年生で行う「ESDめがねを付けて考えよう！」の単元も、開発当初は1年生で行っていた。また、4年生で行う「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」も始めた当初は6年生で行っていた。

昨年度5年生で行った「子どもと海のSDGs」も、今年度は「Let's clean the sea」～世界の海のために私たちができること～という単元名に変わり、4年生で行っている。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、関係機関や企業とのコラボが難しかった。新しい生活様式の中での新たな取組を模索していかなければならないだろう。そのためにも適切なCheck(評価)と現実的なAction(改善)をしっかりと行っていかなければならない。

3 成果と課題

ユネスコスクールとしての取組が徐々に近隣の小・中学校のみならず、保育園や幼稚園、市内全域の小中学校に認知されるようになってきた。また、保護者や地域の方々にも広く知られるようになってきた。認知度の広がりとともに、学校の活動にこころよく協力してくださるようになってきた。子どもたちの活動が、学校内だけにとどまらず、地域へと広がりを見せるようになってきた。

本校では、長年生活科・社会科を研究教科として継続してきた経緯を踏まえ、「単元のねらいが持続可能な社会の担い手を創ることとどう関連しているのか」

という視点からアプローチしてきた。アプローチをするときのキーワードとなるのが「ESDめがね」である。ESDめがねをかけ、4つの視点で物事を見ることができるようになれば、子どもたち一人一人が、自然や社会に関わる様々な地球規模の課題を自らの課題として捉え、一人一人が自分にできることを考え、実践していくようになる。そのために留意しなければならないのは、「教科を教える」から「教科で学ぶ」への意識の転換である。

「コンピテンシーで教科等を横断する」ことを実現するためには、各教科が子どもたちにどのような能力を育てるのか、今まで以上に日々教材研究を積み重ね「教科の本質」をしっかりと認識していかなければならないと考える。

第 11 回 ESD 大賞
受賞校実践集

発行日：令和 3 年 2 月 26 日

発行：NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-40

Tel :03-3295-7051

Fax :03-3295-7054

E-mail : info@jp-esd.org